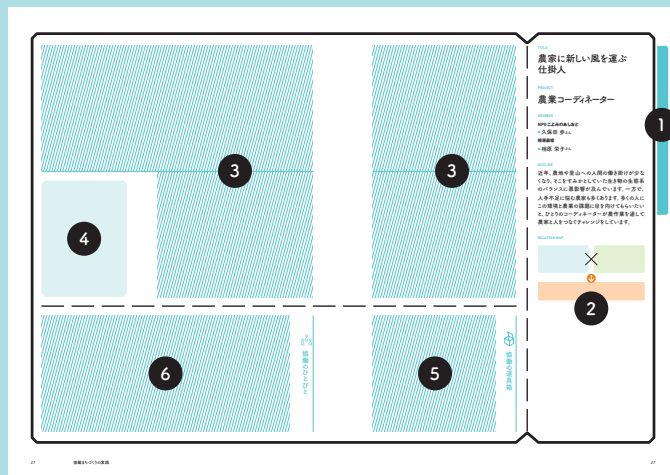


- CASE 01 農業コーディネーター
- CASE 02 仙台スポーツボランティアプロジェクト
- CASE 03 JSF スウィングカーニバル
- CASE 04 GREEN LOOP SENDAI
- CASE 05 中山地区 週末一軒家プロジェクト
- CASE 06 関山街道フォーラム協議会
- CASE 07 新浜町内会による大震災後の交流創出
- CASE 08 お薬師さんの手づくり市
- CASE 09 ラヂオはいらいん若林
- CASE 10 荒井東地区エリアマネジメント
- CASE 11 いってみっぺ秋保
- CASE 12 SHIRO Lab.
- CASE 13 ホームレス伴走型支援事業
- CASE 14 障がい者就労支援 複合機清掃サービス
- CASE 15 アディクション・フォーラム in 仙台
- CASE 16 ほっとネット in 東中田
- CASE 17 アート・インクルージョン
- CASE 18 ほっとサロン将監
- CASE 19 東北レインボーSUMMER フェスティバル
- CASE 20 NPOで高校生の夏ボラ体験

[事例ページ構成]



- 1 **タグ**: 活動を表すキーワード。
- 2 **RELATION MAP**: プロジェクトの構成団体のつながりを表す関係図。
- 3 **本文**: 協働のきっかけとその取り組み、活動の内容など。
- 4 **協働のグッドポイント**: 工夫されている仕組み、活用できるポイントなど。
- 5 **協働の道具箱**: 活動に欠かせない道具や、活動を実施する際に用いるツール。
- 6 **協働のひとびと**: 活動に関わっている人々やその様子。



[第2章]

# 協働の事例20

クリエイティブな協働を進める20の事例を紹介。  
RELATION MAPや協働の道具箱、協働のグッドポイントなど、多くのヒントやアイデアが詰まっています。

# TITLE 農家に新しい風を運ぶ 仕掛人

## PROJECT 農業コーディネーター

### MEMBER

NPOこよみのあしおと

●久保田 歩さん

相原農場

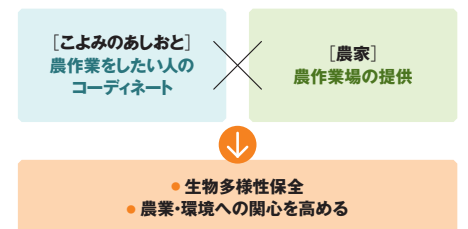
●相原 栄子さん



### OUTLINE

近年、農地や里山への人間の働き掛けが少なくなり、そこをすみかとしていた生き物の生態系のバランスに悪影響が及んでいます。一方で、人手不足に悩む農家も多くあります。多くの人にこの環境と農業の課題に目を向けてもらいたいと、ひとりのコーディネーターが農作業を通して農家と人をつなぐチャレンジをしています。

### RELATION MAP



### CONTACT

NPOこよみのあしおと

〒980-0811 仙台市青葉区一番町4-1-3 レターケースNo.88

Mail: lets\_koyooto@yahoo.co.jp

## 「農」に人が集う

夏真っ盛りの8月、若林区日辺にある相原農場でジャガイモの収穫イベントが行われました。イベントに参加したのは農作業を体験してみたい消費者の方々。事前に葉や茎を切り落としてあるジャガイモ畑に機械が入ると、土の中からポンポンとたくさんジャガイモが飛び出していきます。参加者はジャガイモの土を落として畑に並べ、乾いたらカゴに入れていきます。作業が終わると農家の相原さんから収穫したジャガイモが振る舞われました。このイベントは参加者が労働力を提供し、その対価として農家が農作物を提供するという仕組みで、冬場を除き毎月1回開催されています。農作業を

したい人と農家をつなぐのは、こよみのあしおと代表の久保田さん。農作業を通して①既存の農地を守る生物多様性保全、②農業について学ぶ触れる農業活性化、③人の交流を目的に活動しています。久保田さんは、以前は環境調査を行う会社に勤めていました。その時に、時代の変化に伴って農地や里山が手入れされなくなることで、生き物のすみかが奪われていることを知り、「人間が一度手を入れた土地を荒れないように守っていくことが、人間の役割なのでは」と思うようになったのだと言います。そんな時に体験した農作業がとても楽しく、「農作業をしてみたい人はもっといるはず。人手が足りない農家で一緒に作業すれば一石二鳥、さらに農

地を手入れしていくことにもつながって一石三鳥だ」と、突き動かされるように2010年6月に団体を設立しました。

## 始まりは一本の電話から

相原さんは、久保田さんから初めて電話がかかってきた時のことをこう振り返ります。「夫婦2人で手一杯だったから、ありがたい!と思った。しかも若い人が社会全体のことを考えているなんて本当に感動したの」。元々環境に優しい農業をスローガンにしていた相原さん。2人の思いが重なり活動が始まりました。

現在、久保田さんの活動の趣旨に賛同し、協力する農家は相原農場を含めて3軒。子どもから大人まで、これまでに延べ600人以上の方が農家を訪れました。こよみのあしおとのホームページには、参加者から「農作業をすることで農家のありがたみや野菜の価値を知りました」「自分の手で仕分けることで、今まで虫食いや汚れを気にしていた子どもたちが抵抗もなく美味しそうに食べています」などといった体験談が寄せられています。

## 農家も気付かせてもらっている

活動を始めてから、久保田さんは農作業と併せて

さまざまなイベントを企画してきました。プロのカメラマンを招いた写真教室や、不要になった布を持ち寄ったカカシ作り選手権、福祉施設とコラボした野菜を入れるかばん作りなど。これらの企画には、農業と「何か」を組み合わせることで、新しく興味を持ってくれる人を見つけたという思いが込められています。相原さんは「来てくれた方が、自分とは全く違う目線で農家を見てくれて、企画のたびに新しい気付きがある。農家がすごく生かされているって思う」と語ります。

久保田さんも「一緒にやってくれる人がいるから続けていける。もっと多くの人や企業とつながって、農業や環境に目を向けてもらいたいです」と話します。農家が丹精込めて築き上げてきた農地を舞台に、新しい風を吹き込むチャレンジは続きます。

(取材・文：市職員ライター 菅井牧子)

## 協働のグッドポイント

- 農業体験・参加を希望する消費者の方は労働力を提供し、農家側は対価として貨幣と見立てた「野菜」を提供することで、双方をつなぐ仕組みを作った。
- 「農業」に異なる視点「アート」を加えることで新しい人を巻き込むことにつながり、協力者として関わりを持つ人を増やしていった。



協働の道具箱

さまざまな活動が生まれる相原農場の畑。農家とイベントの参加者をつなげるのは、愛情を込めて作られた農作物。 [こよみのあしおと提供]



協働のひとびと

[2:こよみのあしおと提供]



1: 相原さん(中央)、久保田さん(右)と農作業参加者の皆さん。  
2: カカシ作り選手権の様子。

## TITLE 市民でスポーツを支えて まちを笑顔に

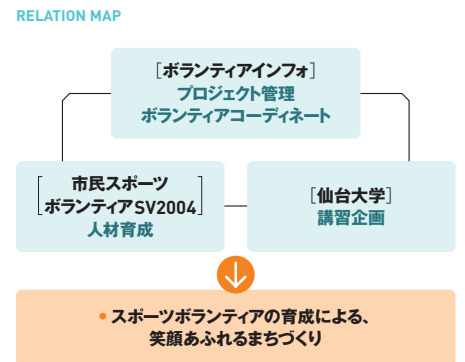
### PROJECT 仙台スポーツボランティア プロジェクト

MEMBER  
特定非営利活動法人ボランティアインフォ

- 北村 孝之さん  
市民スポーツボランティア SV2004
- 村松 淳司さん  
仙台大学
- 仲野 隆士さん



OUTLINE  
仙台を日本一スポーツボランティアの活動が盛んな都市にするため、「仙台スポーツボランティア」プロジェクトが始動しました。NPOと大学が協働して、スポーツボランティアを志す市民のきっかけづくりに挑戦しています。



CONTACT  
特定非営利活動法人ボランティアインフォ  
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-12-12 GMビル2F  
Mail: info@volunteerinfo.jp  
市民スポーツボランティア SV2004  
〒980-0811 仙台市青葉区一番町4-1-3 レターケースNo.50  
Mail: izumita@dm.mbn.or.jp  
Tel/Fax: 022-274-1469  
仙台大学  
〒989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南2-2-18  
Mail: tk-nakano@sendai-u.ac.jp

## 若手が参加しやすい風土づくり

仙台市は「スポーツシティ仙台」を掲げ、スポーツイベントの誘致と開催支援、さらには、交流人口の拡大と地域経済の活性化を図っています。その中では観客誘導・エコステーション運営など、大会や試合会場を裏方として支えるスポーツボランティアの存在が欠かせません。

しかし、ボランティアの高齢化により、新たな担い手の不足に加え、募集の告知が各試合の運営者ごとに出されることから、情報の入手方法が分かりにくいという課題がありました。そこで、ボランティア活動に参加する若手を増やし「スポーツを支える楽しさを伝えたい」とプロジェクトを企画

したのがボランティアインフォです。ボランティア向け情報発信が得意分野で、年間約2000人のボランティアをコーディネートしています。呼び掛けに応じたのは、仙台におけるスポーツボランティア団体の草分けとして実績がある市民スポーツボランティアSV2004と、「健康づくり運動サポーター」という養成講座を設計した経験を生かし、スキル向上を担当する仙台大学です。

このプロジェクトは二つの柱から成り立っています。一つは、新たなボランティア育成のための「仙台スポーツボランティア研修会」を開催すること。この研修会でスポーツボランティアに必要な知識を体系化して学んだボランティアは、業務を依頼する主催者側にとっても、安心して仕事を任せること

## 協働の道具箱



スポーツボランティア研修会修了の証。ロゴ入りオリジナルバスクース。

とができる存在になります。

もう一つは、各種スポーツボランティアの募集情報を一元化することです。Webサイトから申し込める仕組み作りとその運営も目指しています。

## 異種スポーツ間が連携

仙台でスポーツボランティアが芽生えたのは、2002年のFIFAワールドカップ。多くの市民がボランティアとして活躍し、その後それに関わった市民が中心となり「スポーツボランティアを仙台に根付かせたい」と2004年にSV2004を設立。以来、さまざまなスポーツ会場で活動してきました。

SV2004副代表理事の村松さんは「異種スポーツ間でボランティアが協力するのが仙台の特長」と話します。仙台は「楽天イーグルス」「ベガルタ仙台」「仙台89ERS」など、プロスポーツ団体が数多くあり、スポーツに触れる機会に恵まれていることも、スポーツボランティアが活発に活動できる下地になっています。現在、楽天イーグルスには200人以上のボランティアが登録し、活躍しています。

## 仙台発のモデルとして全国へ

ボランティア同士で多世代間の交流ができるの

も、スポーツボランティアの醍醐味です。仙台大学副学長の仲野さんは「スポーツボランティアは敷居が低いので、スポーツが苦手でも応援したい気持ちがあれば大丈夫」と話します。村松さんは「ボランティアは報酬を得ていないので、観客や選手と対等な立場であり、試合の一体感を高めることができます」とやりがい話し、さらに「多様なスポーツのボランティアが連携するのが仙台の特徴。それを仙台モデルとして全国に広げたい」と意気込みます。

2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。ボランティアインフォ代表理事の北村さんは「このプロジェクトを通じて、仙台からスポーツボランティアの輪を広げ、ボランティアを文化として根付かせたい」と夢を膨らませます。

（取材・文：市民ライター 溝井貴久）

## 協働のグッドポイント

- 新たなボランティアを獲得・育成するために、情報発信、ボランティア育成プログラム作り、ボランティアのノウハウ・経験の提供といった、それぞれの得意分野を生かしたプロジェクトを生み出している。

## 協働のひとびと



1: 会場に設けられたエコステーションで、ごみの分別を呼び掛けるボランティア。  
2: スポーツ会場には欠かせない存在のボランティアは、年代も性別もさまざま。

# TITLE 垣根を越えて 仲間の気持ちをつむいでいく

## PROJECT JSF スウィングカーニバル

### MEMBER

公益社団法人 定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会

- 木村 真介さん
- 相原 美和さん
- 株式会社ヤマハミュージックジャパン(おとまち)
- 佐藤 雅樹さん
- 伊藤 亜津子さん

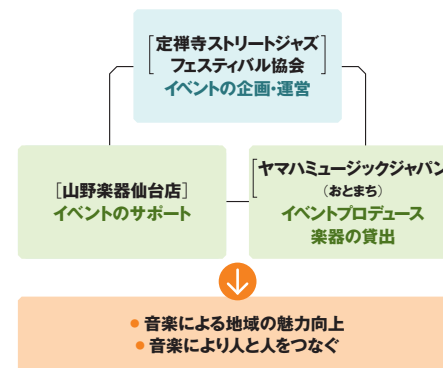


株式会社山野楽器仙台店

### OUTLINE

仙台の秋を音楽で彩る定禅寺ストリートジャズフェスティバル。参加型のプログラム「JSFスウィングカーニバル」の会場では、楽器を持って集まった市民数百人による大合奏が行われます。人と人をつなぐ自由参加のステージは、音楽によるまちづくりを目指す企業との協働により実現しました。

### RELATION MAP



### CONTACT

公益社団法人定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会  
〒980-0803 仙台市青葉区国分町3-8-3 新産業ビル304  
Mail: info@j-streetjazz.com  
Tel: 022-722-7382 / Fax: 022-722-8461  
株式会社ヤマハミュージックジャパン  
〒108-8568 東京都港区高輪2-17-11  
Tel: 03-5488-5438 / Fax: 03-5488-5076

## 場の「楽しさ」を共有する

定禅寺ストリートジャズフェスティバル(JSF)のプログラムの一つである「JSFスウィングカーニバル」は、愛用の楽器を抱えて会場に集まった人たち総勢数百人が一つの音楽をつくり上げる音楽祭です。子どもからお年寄りまで、音楽が得意な人もそうでない人も、会場に足を運べば誰でも演奏を楽しむことができます。主催は定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会。音楽により地域の課題解決や魅力向上に取り組んでいるヤマハミュージックジャパン「音楽の街づくり推進課」(以下、おとまち)との協働により構想を立ち上げ、3年間の話し合いの末、2011年に開催が実現しました。

元々は年々増加する、JSFの選考に漏れてしまった方のステージ確保という課題解決が始まりました。しかし次第に、就職、結婚、出産といったライフステージで音楽から離れてしまった人たちや、吹奏楽経験者などが楽器を再び手に取り、音楽への思いと演奏する喜びを分かち合う場になってきました。定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会の木村さんは「数千人の人波が対流する晴れやかな場所で、自分たちの音楽を存分に発揮できるプログラムなんです」と語ります。仙台出身である「おとまち」の佐藤さんがJSFのことを知ったのは東京に出たからでした。「仙台でもおもしろいことをやっていると聞いて、軽い気持ちで見に来たんですが、衝撃を受けました」と当

## 協働の道具箱



楽器を持っていない人に無料で貸し出されるパーカッション。

時の感動を振り返ります。

JSFスウィングカーニバルの取り組みについて、佐藤さんは「単独ではできません。演奏者、ボランティア、企業が協働して初めて物事が回ります。垣根を越えて理解し合ったことで仲間意識が生まれ、継続につながっています」と言います。

## エンタメ性と仙台らしさ

ゲストミュージシャンとしてプロのナビゲーターを迎えた2012年の開催からは、参加者がソロを披露するコーナーが生まれ、エンターテインメント性が出てきました。2016年からは仙台出身のトランペッターがナビゲーターの役目を務めています。さらに、プログラムを立ち上げ展開してきた「おとまち」のノウハウを、地元楽器店である山野楽器仙台店が引き継いでイベントをサポートするなど、より地域に根ざした取り組みになってきました。

## 10年後も関わり続けたい

会場では演奏者と観客が一体化し、一つの音楽として昇華させていくという醍醐味を味わうことができます。協会の相原さんに、10年後の関わり方を尋ねると

「スタッフを卒業して観客になるのが理想です」と即座に答えてくれました。東京に住む「おとまち」の伊藤さんは「他の地域にこんな事例はありません。次は私も演奏者で参加したいです」と語ります。また、木村さんが「いずれ僕らが自由に楽しむ側になりたいです」と言えば、佐藤さんも「定年になったら観客になって、体中で音楽を思いっきり楽しみたいですね」と夢を膨らませます。今のメンバーが全員抜けても、この素晴らしいイベントを受け継いでほしい、仙台で続いてほしいと願う皆さん。自ら音楽を楽しむことに始まり、異業種と協働することでその輪を広げてきたビッグイベントは、さらに人々の熱い思いによってさまざまな相乗効果を生み出しながら継承されていきます。

(取材・文：市民ライター 大林 紅子)

## 協働のグッドポイント

- 仙台を代表するビッグイベントに参加がかなわなかった人たちがいることに気付き、そのニーズに応え事業化したモデル。
- 「とにかく楽しむ」ということを共有し、実行委員会、ボランティアスタッフ、参加者、企業など、みんなが関わりやすい仕組み作りを心掛けている。

## 協働のひとびと



1: 全国から集まったプレーヤーの皆さん。  
2: ゲストミュージシャンと演奏を支えるホストバンド。

## TITLE ほしい暮らしを 自分たちの手で実現していく

### PROJECT GREEN LOOP SENDAI (グリーン ループ センダイ)

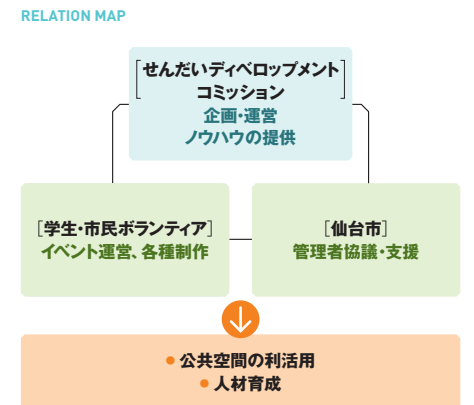
MEMBER  
せんだいディベロップメントコミッション株式会社

●本郷 紘一さん



仙台市都心まちづくり課

OUTLINE  
公園や歩道などの公共空間を利活用した魅力あるまちづくりを目指し、民間主導で始まった「GREEN LOOP SENDAI」。新たな価値や人材の創出につながる場として、キャストと呼ばれる学生や市民のボランティア、行政も巻き込みながら、ワクワクするまちづくりを進めています。



CONTACT  
せんだいディベロップメントコミッション株式会社  
〒980-0803 仙台市青葉区国分町1-8-14  
仙台協立第2ビル8F  
Mail: hongo@sdcinc.jp  
仙台市都心まちづくり課(旧市街地整備調整課)  
〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1  
Tel: 022-214-8311

## 緑のまち・仙台を巡る

毎週、同じ場所でマルシェが開かれ、コーヒーやパン、ジャム、花などが売られる。自然な形で、それぞれが望むライフスタイルが手に入る。そんな「理想のまち」を実現するために、仙台市と協働で事業を進めている人たちがいます。その中心の一人が、本郷紘一さんです。仙台を拠点に、美容室やコーヒー店を経営する傍ら、自らが理想とする「まち」の実現に向け幅広く活動しています。

GREEN LOOP SENDAIは、定禅寺通をはじめとする通りや公園など、仙台の都市資源である緑豊かな公共空間を使い、複数のイベントを同時に開催するプロジェクトです。市内に点

在するテーマの異なった会場を回ること、緑の回廊(GREEN LOOP)を体感しながら楽しめる仕掛けになっています。コーヒーや雑貨、パン、ワインなどさまざまなものを扱うお店が、そろうの木組みの屋台で並ぶ風景が印象的です。

## 自分たちの手で 理想のまちをつくる

「公園でコーヒーが飲めたら素敵だな」という思いから、カーゴバイクを使って公園で仲間とコーヒーを売り始めた本郷さんは、仙台市が取り組んでいる「リノベーションまちづくり」と出会いました。仙台市では、来るべき人口減少社会における

都市の再生や若年層の流出を食い止めようと、遊休不動産のリノベーションや、公共空間の利活用を柱としたまちづくりを公民連携で進めています。本郷さんは「事業を進める過程で、さまざまな立場の人がまちづくりに関わることになります。この連鎖がいろいろところで起これば、若者の流出を食い止めることができるだけでなく、誰もが住んでみたい都市・仙台へと変わることができると話します。仲間とともに、公共空間の利活用を目的とした公民連携による新しい取り組みを学びながら、さっそく活動を始めました。

2016年には着町公園でDay out!!(ティアウト)、続いて定禅寺通でT O H O K U C O F F E E S T A N D F E E S(東北コーヒースタンドフェス)を開催。これらの実践の積み重ねがGREEN LOOP SENDAIにつながっていきます。事業実施にあたっては、本郷さんたち民間側には、公共性の高い事業を行うとともに、公共空間を活用してきちんと収益を上げること、行政側には、弾力的な制度運用や関連部署への橋渡し役などの環境整備が求められました。

互いの持ち味を生かしながら、公民連携のまちづくりの先例として持続的な事業になるよう、イベントで生み出された利益は次の事業に回す仕組みにするなど、かかる費用を行政に一切頼らず自分

たちで賄えるように、計画をしっかり立てることに重点を置きました。そしてこのプロジェクトは、これからの仙台のまちづくりのビジョンを共有するプレイヤーの芽を育む機会も提供しています。

## マルシェのある風景

自分たちの理想の暮らしをどこで、どうやって実現するか。日常生活を送る上で、また子育てをしているなかで、誰もが一度は考えることです。本郷さんたちが自分たちの手でつくるGREEN LOOP SENDAIの取り組みは、そうした理想の暮らしへの第一歩です。本郷さんたちのもとには、一緒にまちづくりに参加したいという若者が集まってきています。少しずつ、仙台というまちが変化する兆しが見えています。

(取材・文：学生ライター 松川真子)

## 協働のグッドポイント

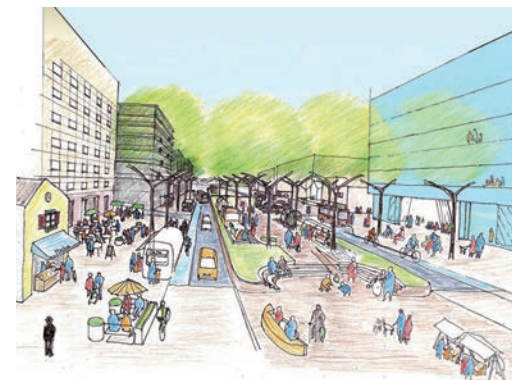
- 都市公園法の弾力的制度運用により、公共空間を市民に開放し、使い手が自由に使える仕組み作りを行った。
- 民間と行政の垣根を超えた、まちづくりのプレイヤーの創出と、民間主導で持続性のある自立した新しいまちづくりのモデル。

## 協働のひとびと



1: 本郷さん(帽子の男性)を中心に定禅寺通で作戦会議。  
2: 西公園に木組みの屋台が並び、GREEN LOOP SENDAIの一場面。

## 協働の道具箱



本郷さんたちの理想とする定禅寺通のイメージ図。  
車道を縮小し拡大された歩道や緑地で、思い思いの時間を楽しむ人々。

# 「ヨソモノ」のアイデアで眠れる地域の財産を生かす

## PROJECT 中山地区 週末一軒家プロジェクト

### MEMBER 有限責任事業組合モダンタイムス

- 岩間 友希さん
  - 根本 聡一郎さん
  - 沼田 佐和子さん
- 週末一軒家サポーター

- 菅原 暢文さん
- 特定非営利活動法人中山街づくりセンター
- 千葉 裕貴さん



### OUTLINE

中山地区商店街と町内会の有志が立ち上げたNPO法人の空き家活用事業。地域外の若者たちが新たな挑戦を始めました。そしてその活動を軸に、活力あるまちづくりが地域の方々の手で進められています。

### RELATION MAP



- チャレンジを受け入れる開かれたまちづくり

### CONTACT

有限責任事業組合モダンタイムス  
Mail: info@home-weekend-home.link  
特定非営利活動法人中山街づくりセンター  
〒981-0952 仙台市青葉区中山4-14-35  
Tel: 022-303-8731/Fax: 022-719-0631

## 空き家を活用した 地域交流の場併設のシェアハウス

仙台市中心部からバスで15分。大通りから細い路地に入ると昔ながらの2階建ての家が見えてきます。ライオンソッカー付の玄関扉を開けると、木目が美しい床や壁が現れ、最初の部屋は蔵書で埋まる大きな書棚付きの洋室、さらに進むと床の間のある和室があります。そして、開放された縁側の先には菜園。昭和の時代を感じさせる落ち着いた空間が広がっています。

2017年4月に青葉区中山5丁目にオープンした「中山モダンハウス」。築40年の空き家を活用して、2階の2部屋をシェアハウスに、1階は時間

## 新たな生活スタイルを提案する 週末一軒家プロジェクト

中山地区は、1960年代頃から造成が始まった郊外の静かな住宅地。団地の高齢化に伴う空き家の増加という地域課題を抱えており、この状況を改善するため、地域に若い世代を呼び込もうと、商店街と町内会の有志で中山街づくりセン

ターを設立。同センター理事の千葉さんは「厄介なものも、人の手が入ることで資産になる」と話します。

中山モダンハウスを運営するのは、仙台市が開講するまちづくり人材育成講座で出会った岩間さん、根本さん、沼田さん。3人と空き家をつなげたのが千葉さんです。

丁寧に使われた昭和の家は、平成育ちの彼らにはモダンで斬新な異空間に映りました。若者の多くは、便利な街中に住み、部屋には寝に帰るだけ。必要なのは最小限のスペースのみ。そんな生活スタイルに疑問をもった根本さんたちは「軒家をみんなでシェアすれば、広い空間を自由に使い、マンション暮らしでは得られない豊かな時間を過ごせるかもしれない」と週末一軒家プロジェクトをスタートさせました。

## 人と人との結び付きが 地域の明日を生む

岩間さんは初めて中山を訪れた時のことを「地域の子どもたちが知らない大人にもあいさつすることに大変驚きました」と振り返ります。セキュリティ万全のマンションでは見知らぬ人には声を掛けないというのが日常ですが、ここでは逆に、住民が声を掛け合うことで防犯の効果を高めていると感

じたそうです。

モダンハウス運営のモットーは「楽しく、無理なく」。3人それぞれの「場づくり」や「経営」をしたという欲望も満たしつつ、週末、彼らは中山に通います。千葉さんは「ヨソモノ」の若者たちに「おもしろいことをもっとやれ」と熱いエールを送り、地域に眠る資産を生かすきっかけとなった彼らの行動に期待を寄せています。

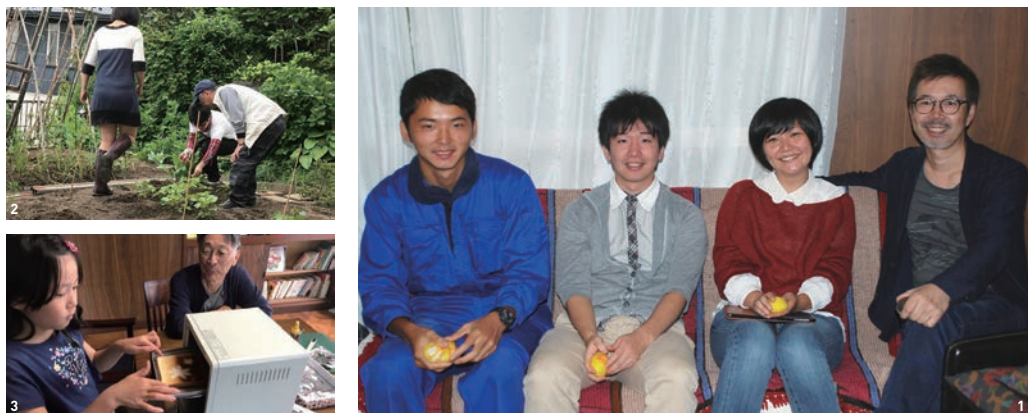
中山では、多世代交流センターの建設が2018年5月の完成に向けて進んでいます。これに合わせ、モダンハウスをモデルケースに、センター活用のためのワークショップも開催。地域住民が講師となる趣味の教室、店主が専門分野を教えるワークショップなど、次々にアイデアが湧いてきます。これらを実現するため、「一緒にやりたい人この指とまれ!」と活力ある地域住民が主体となり、中山の魅力あふれるまちづくりが進められていきます。

(取材・文：市民ライター 小野恵子)

## 協働のグッドポイント

- 「ヨソモノ」の視点を持った態度の高い若者の新しい試みに、地域とのつながりを持つ人が若者と地元住民の仲介役となり、地元住民の理解を促すことでプロジェクトの充実を図った。

## 協働のひとびと



1: 週末一軒家プロジェクトの皆さん(左から菅原さん、根本さん、岩間さん、千葉さん)。  
2: 庭の一部を菜園としても貸し出している。| 3: ある日のイベントは、トーストアート!

## 協働の道具箱



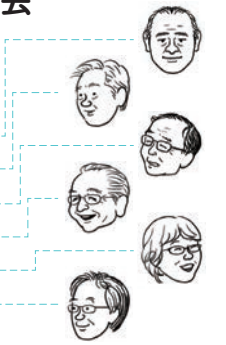
昭和を感じさせる、レトロモダンな一軒家。入口には在宅日を知らせる看板。

# 関山街道の宝を再発見 地元への愛着でつくる活動

## PROJECT 関山街道 フォーラム協議会

### MEMBER 関山街道フォーラム協議会

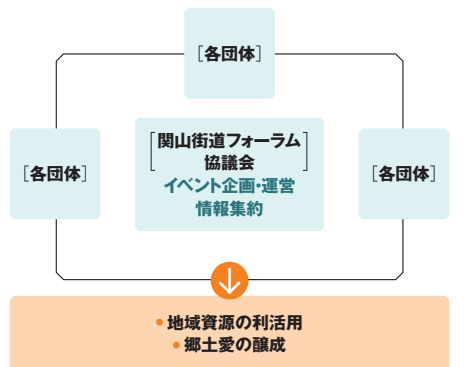
- 平川 新さん
- 工藤 秀也さん
- 加藤 栄一さん
- 秋山 榮作さん
- 早坂 光子さん
- 横山 修司さん



### OUTLINE

仙台 - 山形間を結ぶ関山街道(国道48号)とJR仙山線は古くから人の交流、物流を支えてきました。これらの歴史、自然、文化などを資源として、地域住民が連携しながら研究や探訪、観光イベントを実施し、魅力を発信しています。

### RELATION MAP



CONTACT  
関山街道フォーラム協議会事務局  
Tel: 090-7939-1855(横山)

### 地域を元気にしたい!という思い

今も昔も、仙台と山形をつなぐ主要な道路の一つである関山街道。この地域は、作並温泉・定義如来といった観光スポットがあるほか、2017年に全線開通80年を迎えたJR仙山線が走る歴史・文化や自然の宝庫です。  
こうした関山街道沿いの宝を発見し、発信するために活動しているのが「関山街道フォーラム協議会(以下、協議会)」です。設立は2011年。それまで、関山街道沿線でそれぞれに活動を続けてきた団体が、地域の持つ歴史・文化・自然の魅力を再確認し、「地域の魅力を伝えたい」「地域を元気にしたい」という思いのもとに集まりました。協議

### 見つけて語る「地域の宝」

協議会には、市民活動団体、観光(作並温泉旅館組合定義観光協会)、行政(広瀬市民センター)といった多くの団体や個人によって組織されています。その数は、2017年現在で17団体会員約60人になります。  
会には「土の道」「鉄の道」「広報・編集」の3つの部会が構成され、部会ごとに事業活動・イベントを企画し、広報活動などを協力・連携して実施してきました。  
協議会会長の平川さんは「自分たちの暮らす地域に愛着を持ちたい、そのための手掛かりが関山街道にはある」と思いを語ります。

おり、地域の活動者のプラットフォームのような役割も担っています。

広報・編集部会長の早坂さんは「他団体との連携によって視野が広がった」と話し、「違う立場や視点を持つ他の活動者の意見を聞くことで、自分たちだけでは気が付かなかった問題点にも気付くことができる」と言います。協議会を通じて、団体同士も新しい考えを取り入れながら活動しています。  
事務局長の横山さんは「それぞれの団体や個人だけでは難しい活動も、みんなで手を取り合い支え合って実現することにつながっていきたい」と話します。地域を盛り上げる団体がつながりを持って、それぞれの活動に生かしたり、一緒に新しい活動を始めたりする取り組みは、この協議会の活動に限らず今後の地域活性化のためのヒントになるかもしれません。

(取材:文:市職員ライター 林悠太)

### 活動の肝は「ゆるやかな連携」

協議会は、活動者同士の情報交換の場にもなっています。

### 協働のグッドポイント

- つながることで、一人ではできなかったこと、思い付かなかったことができる。
- 市民センターと連携することで、活動への信頼度がアップし、他団体との連携が広がる。

### 協働のひとびと



1:ある日の「ぶらっとカフェ」の様子。試食付きの小麦挽き体験後は「新・作並音頭」を披露。  
2:各団体の代表による熱のこもったミーティング。

### 協働の道具箱



年2回発行のニュースターで情報発信。多岐にわたる事業もこれで一目瞭然。

## TITLE 専門家とタッグを組み ここだけの魅力を発信!

### PROJECT 新浜町内会による 大震災後の交流創出

#### MEMBER

新浜町内会

- 平山 新悦さん
- 瀬戸 勲さん
- 平山 一男さん
- 遠藤 源一郎さん

貞山運河研究所

東北学院大学教養学部平吹喜彦研究室

東北学院大学文学部菊池慶子研究室

せんだいメディアテーク

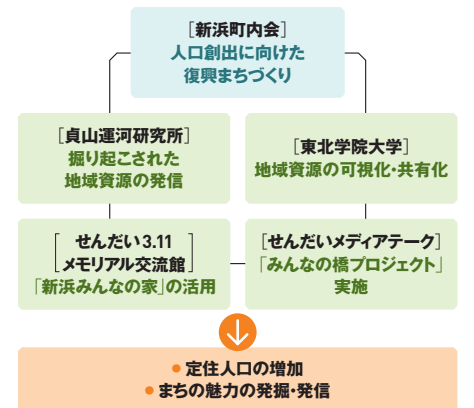
せんだい3.11メモリアル交流館



#### OUTLINE

江戸時代から続く海辺の集落・宮城野区新浜地区。東日本大震災により甚大な被害を受けたことで、喪失の危機に直面している地域資源がたくさんある地区です。その地域資源を見つめ直し、活用しながら再び新浜ににぎわいを取り戻そうと、町内会はさまざまな主体との連携を始めています。

#### RELATION MAP



#### CONTACT

新浜町内会

Tel: 090-4630-8344 (庶務担当: 遠藤)

## 急がれる交流人口の創出

震災で甚大な被害を受けた新浜町内会では、定住人口の増加を図るきっかけとして、「新浜ならではの地域資源」を活用しながら地域外からの交流人口を創出し、にぎわいを生み出そうと「ユビーチ〈新浜〉プラン」を掲げ、さまざまな主体との協働を進めています。

2015年には貞山運河研究所との共催によるミニフォーラム「新浜の海岸公園と貞山運河の活用」、2016年には東北学院大学の菊池教授（日本近世史・女性史と平吹教授（景観生態学の協力のもと学習会を開催。地元住民と大学の連携によるフィールドワークでの発見を生かし、『ふるさ

## 「馬船」活用で地域の魅力を再発見

新浜には日本最長の貞山運河が流れています。貞山運河に架かる橋は津波により流され、住民や訪れた人々は海辺へ渡ることができなくなりました。再び海辺に渡りたい、貴重な歴史遺産である貞山運河の魅力を発信し、にぎわいを創出したいと、新浜町内会と貞山運河研究所は、2017年度仙台市協働まちづくり推進助成事業に提案し、貞山運河を舞台にしたイベント「新浜の渡し船とフットパス」を始めました。

躍した「馬船」を再現。6月から月1回行われ、地域外の方ももちろん、久しぶりに貞山運河の向こうの風景が見られるということで、住民も参加しにぎわいを見せています。

馬船で貞山運河を渡った先には、松林の植樹完成記念で建立された「愛林碑」や、海の神様を祭った「八大龍王碑」があり、新浜地域の文脈に触れる機会にもなります。また、太平洋を臨む砂浜はとも美しく、ハマヒルガオが咲き乱れる光景も残っています。これは、自生してきた植物を保護する働き掛けを新浜町内会と連携しながら絶えず続けてきた平吹教授をはじめとした調査グループ「南蒲生／砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」の成果でもあります。新浜町内会と多様な主体との協働が、自然の保護にもつながっています。

## 「よそ者」が動くことで 住民も気付く

新浜町内会ではさらなる新しい取り組みとして、流出した橋の再生に向けて、現代美術家の川俣正氏による「みんなの橋プロジェクト」をせんだいメディアテークとの協働で進めています。また、2017年4月に開所した、地域の新たな拠点である「新浜みんなの家」の活用を図るべく、せんだい3・11メモリアル交流館と月1回の懇談会「新

## 協働のひとびと



1:「渡し船とフットパス」で再現したかつての馬船を体験する人々。| 2:新浜に流れる貞山運河。

3:地域の思い出が住民によって語られる「新浜お茶っこ」。| 4:新浜の歴史と自然の学習会では、調査に関わった学生たちが成果を発表。

[3・4:せんだい3.11メモリアル交流館提供]

## 協働のグッドポイント

- 住民組織が専門性を持った主体と連携することにより、深い考察を伴ったアクションが生まれた。
- 集会所や「新浜みんなの家」といった拠点を話し合いの場として生かすことにより、ゆっくり、じっくり住民と協働団体との関係構築を図っている。

(取材・文:せんだい3・11メモリアル交流館 田澤 紘子)



## TITLE 地元で愛される地域資源は人々のご縁をつくる場所

### PROJECT お薬師さんの手づくり市

#### MEMBER

陸奥国分寺薬師堂

●村山 裕俊 さん

(薬師堂手づくり市実行委員会委員長)

薬師堂手づくり市実行委員会事務局

●佐藤 正記さん

(有限会社地域環境計画室 TEO)

●西大立目 祥子さん

(フリーライター・青空編集室)

仙台市文化財課

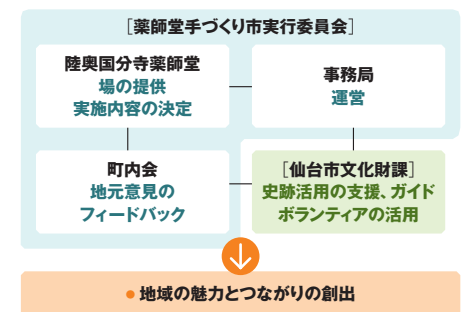
●小山 絃明さん



#### OUTLINE

地下鉄東西線の駅の一つでもある「薬師堂」。国の重要文化財に指定されている地域のシンボルです。お寺の境内では、「ご縁日」にあたる毎月8日に手づくり市が開催され、多くの人々の出会いとつながりを創出しています。地域資源である史跡の保護と活用を同時に行いながら、地域の活性化に挑戦しています。

#### RELATION MAP



#### CONTACT

陸奥国分寺薬師堂  
〒984-0047 仙台市若林区木ノ下3-8-1/Tel: 022-291-2840  
薬師堂手づくり市実行委員会事務局  
〒983-0845 仙台市宮城野区清水沼2-3-19  
有限会社地域環境計画室 TEO 内  
Mail: oyakushisan@gmail.com/Fax: 022-292-4707  
HP: <http://www.oyakushisan.com/>

### 四季の移ろいを感じる境内で

毎月8日、陸奥国分寺薬師堂の境内の木立の下には100を超えるブースが並び、たくさんのお客様が行き交います。「お薬師さんの手づくり市」では、「手づくりのもので、誰かとつながる」というコンセプトのとおり、手間暇かけて作られた食品や雑貨が販売され、売り手も買い手も声を掛け合っ

て交流を楽しんでいます。会場となる薬師堂は聖武天皇の勅命により建立され、現在に至るまでこの地に生きる人々の縁をつなぎ、見守り続けてきたお寺です。長い歴史のある境内で、暑くても寒くても、雨が降っても雪が積もっても、人々が集い出会う場所として、この手

### アイデアが形になったご縁の力

づくり市は開催されています。

コンサルティング業を営み地方の変化を見てきた佐藤さんは、長年「地域が自らの力で豊かになる術はないものか」と考え続けてきました。そこで着目したのが、住民がさまざまな作品を作り販売する手づくり市です。仙台での開催に向けて、全国の手づくり市を視察しました。そして、まち歩きや歴史的建造物の保存活動をしてきた西大立目さんに開催場所を相談したところ、真っ先にあったのが若林区木ノ下にある薬師堂でした。緑豊かな境内、歴史ある寺院に集い触れ合う場を設

けることができれば、地域ににぎわいや楽しさを生み出すに違いありません。しかも周辺には、新寺や連坊など、伊達政宗公の時代に置かれた寺院が立ち並び由緒ある地域が広がっています。さっそく、薬師堂に直談判に行くと、「ご住職の村山さんは申し出をその場で快諾してくれました。初めて会う人の唐突な依頼にもかかわらず、怪しむことなく受け入れてくれたことに、佐藤さんも西大立目さんも驚いたと言います。ただし、条件が一つ。「市」の開催日をお薬師様のご縁日である8日とすること。村山さんの「参道を行き交う人々とお薬師様のご縁を結ぶことができれば」という思いが込められています。こうして縁日大護摩祈禱会と住職法話に合わせ、手づくり市が開催されるようになったのは2008年のことでした。

### 生きる力が湧き出る手づくり市

近年は薬師堂周辺でも高齢化が着実に進んでおり、毎日の買い出しに困る人も少なくないそうです。食品の取り扱い扱いは、地元町内会からの要望で始まりました。実行委員会には地元町内会も参加し、こうした住民の意見を共有しています。また、文化財の活用のため、国、県、市との連携が欠かせません。手づくり市には、仙台市文化財課の協力を受けたガイドボランティアが、第1回開催から

#### 協働のグッドポイント

- 町内会や住民から丁寧に地域の課題を聞き、手づくり市という手法でその解決を試みた。
- 歴史的な地域資源を有効に活用し、手づくりのものを集めることで共感する人々が集う仕組みを取り入れ、地域のにぎわいづくりに成功した。

(取材・文：市職員ライター 渋谷聡子)



1:この場所があったから協働が始まった。陸奥国分寺薬師堂の境内に集う人々。手づくりの食品や雑貨が、人と人をつなぐ。  
2:薬師堂手づくり市実行委員会の西大立目さん(右)、村山さん(中央)、佐藤さん(左)。3:史跡陸奥国分寺・尼寺ガイダンス施設。|4:手づくり市のノウハウを活用した新寺こみち市。

協働のひとびと

## TITLE 区民の目線で、 区民の声を伝える番組

### PROJECT ラジオはいらいん若林

#### MEMBER

若林区まちづくり協議会ラジオ部門

- 矢尾 研二さん
- 米倉 正子さん
- 佐藤 研さん

株式会社仙台シティエフエム(ラジオ3)

- 青木 朋子さん
- 相澤 美紀さん

仙台市若林区まちづくり推進課

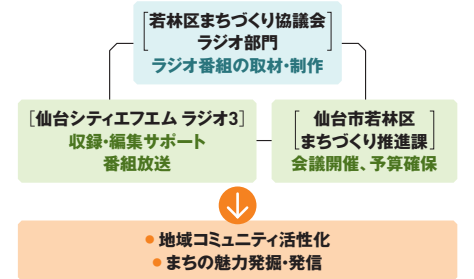
- 千葉 恵子さん
- 高橋 啓さん



#### OUTLINE

若林区民自らが地元の今を伝えるラジオ番組を制作し、コミュニティFM局から放送しています。最大の魅力は、取材する側とされる側が同じ区民だということ。身近な話題を取り上げ、かしまった話ではなく、区民の本音を届けています。

#### RELATION MAP



#### CONTACT

若林区まちづくり協議会ラジオ部門  
〒984-8601 仙台市若林区保春院前丁3-1  
(若林区まちづくり推進課内)  
Mail: wakamachiky@city.sendai.jp  
株式会社仙台シティエフエム ラジオ3  
〒984-0065 仙台市若林区土樋103/Tel: 022-213-2323  
仙台市若林区まちづくり推進課  
〒984-8601 仙台市若林区保春院前丁3-1  
Mail: wak014020@city.sendai.jp/Tel: 022-282-1111

### 丁寧な取材

「ラジオはいらいん若林」は、若林区民の生の声をタイムリーに伝え、まちの魅力を発掘・発信しているラジオ番組です。区内で行われるイベントはもちろん、地元ではおなじみの商店や、名物区民など、多彩なテーマでリスナーを楽しませています。取材に当たるのは、若林区まちづくり協議会ラジオ部門のスタッフ。インタビュは一人一人に丁寧な聞き取りを行うので、取材が1日がかりの長時間になることも。集めた録音データは、ナレーションを加えて30分の番組に編集し、毎月第1・3土曜日午前10時(再放送:翌週第2・4土曜日)より、若林区にスタジオがあるコミュニティFM局のラジオ3

から放送しています。

### 地域密着のラジオ番組

放送が始まったのは2008年10月。当時ラジオ3の社員で、のちに協議会ラジオ部門のスタッフとなった佐藤さんは「若林区には魅力がたくさんあると確信し、より地域に密着するために、地元の方が自ら制作する番組を作りたいと考えました」と若林区まちづくり推進課に企画を持ち込んだ当初のことを振り返ります。また、現在ラジオ3で番組を担当する青木さんは「番組のコンセプトは、若林区民による若林区民のための若林区の情報発信。コミュニティに根ざし

た番組作りを心掛けています。ここまで地元の方が中心になって制作している番組はないですよ」と胸を張ります。市民参加・地域密着を大切に作るラジオ3の制作方針とも合致し、制作ノウハウの提供、編集サポートといった技術的な面から番組作りを支援しています。一方、まちづくり推進課地域活動係長の千葉さんは「区役所職員が地域を知るには限界がある。私たちができるのは、地域をよく知り人脈も広い制作スタッフが、思うように活動できる場を提供すること」と話します。同課の高橋さんとともに予算を組んだり、会議の場所や資料の準備をしたりと、番組作りを陰から支えています。協議会メンバーで番組統括プロデューサーを務める矢尾さんは「スタッフ全員で番組を作り上げることができるよう、会議では全員の意見を尊重しています」と言います。放送内容と取材先は、3カ月に一度の全体会議でみんなの意見やアイデアを出し合って決めています。また、取材交渉の際は、区民同士のネットワークを最大限に活用しています。

### 住民の視点が一番大事

協議会ラジオ部門の米倉さんは「住民目線で取材し、区民の立場に立って、区民のありのままの声を残しています」と話し、「区民同士であるからこ

#### 協働のグッドポイント

- コミュニティFM局が制作技術を提供し、市民の発信力をサポート。区の協議会が市民を巻き込み、地元住民主体の番組作りを実現した。
- 地域の情報を市民の目線で取材し、住民の言葉と声で発信するメディアを作った。



1: 若林区民ふるさとまつりで取材を行うパーソナリティの相澤さん(中央)と協議会ラジオ部門スタッフ。  
2: メンバーが持ち寄ったアイデアを出し合う全体会議。| 3: ラジオはいらいん若林の皆さん。

### 協働のひとびと

### 協働の道具箱



取材には欠かせないICレコーダーとヘッドホン。

# 計画的に理想のまちをつくり、育てる

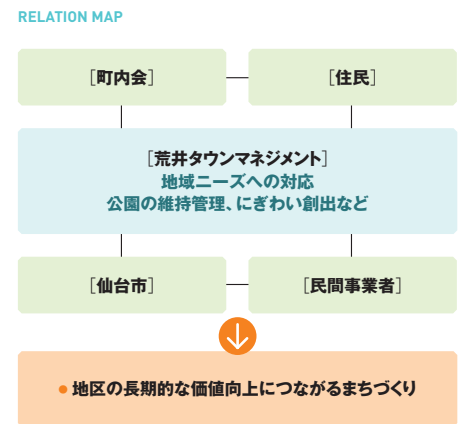
## PROJECT 荒井東地区 エリアマネジメント

MEMBER  
一般社団法人荒井タウンマネジメント

- 和井内 貞明さん
- 榊原 進さん
- 沼里 理恵さん



OUTLINE  
地下鉄東西線の東のターミナル「荒井」。まちづくりが進むこの地域では、民間事業として都市公園内にスポーツパークを設置・運営するなど、全国初の試みが行われています。理想のまちをつくりたいという熱い思いを持って集まった人々が、土地画整理事業と連携したまちづくりに取り組んでいます。



CONTACT  
一般社団法人荒井タウンマネジメント  
〒984-0032 仙台市若林区荒井字7-37-1  
アライデザインセンター 202号  
Tel: 022-352-4774 / Fax: 022-352-4789

### まちの長期的な価値向上を目指す

まちづくりが進む地下鉄東西線荒井駅近くに、荒井東1号公園スポーツパーク「SPiA（スピア）」が2017年9月にオープンしました。公園の一部にテニスとフットサル兼用の人工芝コート3面とクラブハウスが設置されています。これは地域の要望を受け、荒井東地区でまちづくりに取り組む荒井タウンマネジメント以下、荒井TMが、都市再生特別措置法に基づき市との協定によって整備と運営を行う全国初の試みです。公園の維持管理費はコート利用収入などで賄います。

荒井TMは、地域づくりの新たな担い手として、市より2016年1月に都市再生推進法人に指定

た。田畑であった土地に地下鉄が走り、新しいまちができるということで、地権者に加えて民間事業者にも声を掛け、どんなまちを目指すかという話し合いや勉強会を行いました。

副代表理事の和井内さんは、建設コンサルタントとしていくつもの土地画整理事業に携わってきた経験から、「まちは造成しただけではダメなんです。住む人が楽しいと思える理想のまちづくりを実現したいという思いが我々の原点」と言います。東日本大震災では、土地画整理組合がいち早く被災者の住まいの確保を表明し、まちづくりが加速しました。人口が増え、これまでの都市基盤整備に加え、コミュニティの形成も急がれました。そして、2013年、土地画整理組合の関係者と民間企業8社によって荒井TMの前身となる協議会が設立。理事・事務局長の榊原さんは「協働のまちづくりは、行政、住民、企業のいずれの協力が欠けてもできない。それぞれが当事者意識を持って取り組んでいます」と話します。良いまちにしたと熱い思いを持った人々が、まちの価値向上のためにアイデアを出し合い、挑戦を続けています。

### 30年後のまちの未来を見据えて

日頃から住民同士が「顔の見える関係」を築き、いざという時でも安全・安心なコミュニティをつくる

されました。「SPiA」設置運営のほか、にぎわい創出、コミュニティづくり、不動産事業などの多岐にわたる事業を行いながら、得られた利益を地域に還元し、荒井東地区の長期的なまちの価値向上を目指しています。2017年9月には、にぎわい創出事業の一つとして、多くの企業や団体を巻き込み、「あらフェス2017」を開催しました。延べ600人以上の出入となり、各団体のつなぎ役を担う荒井TMは手応えを感じています。

### 早期から理想のまちを話し合う

荒井東地区では、2010年の土地画整理事業から「まちづくり」を意識した計画を進めてきまうと毎月第4日曜日に開催されている「荒井なないうるマルシェ」。食品や雑貨の販売やワークショップが行われ、住民が参加・交流する機会をつくっています。人脈を生かし運営を行うスタッフの沼里さんは「ここは子育て世代が多く、すぐに仲良くなれて一緒にチャレンジができる場所です。まちづくりを通じて自分の成長を感じられるのも嬉しいです」と話します。

和井内さんは「まちは5年、10年で変わっていきます。その間に住む人、来る人にとって楽しいまちを育てていけば、20年、30年後はより良いまちになっていると思います」と語り、榊原さんも「荒井TMが蓄積してきた多くのネットワークと情報を生かし、企業、行政、住まう人々を結び付けることで、まちの価値を向上させていきたいです」と意気込みます。荒井東のこれからの発展が楽しみです。

（取材・文：市民ライター 阿部えりこ）

### 協働のグッドポイント

- エリアマネジメント組織として、自立的な収益構造を築き、地域ニーズへの対応や、住民と企業が活躍できる場をつくり出している。
- 仙台市との協定によって、都市公園の整備と維持管理を行う先駆的な事例を創出。



協働のひとびと



1: 毎月開催される荒井なないうるマルシェ。| 2: 荒井東1号公園SPiAでサッカー&テニス体験が行われ、多くの親子連れが訪れたアラフェス2017。  
3: 企業と連携して開催した野菜ソムリエによる健康セミナー。

【写真すべて：荒井タウンマネジメント提供】

# まだ見ぬ秋保の日常に出会う 地域と観光の新しい形

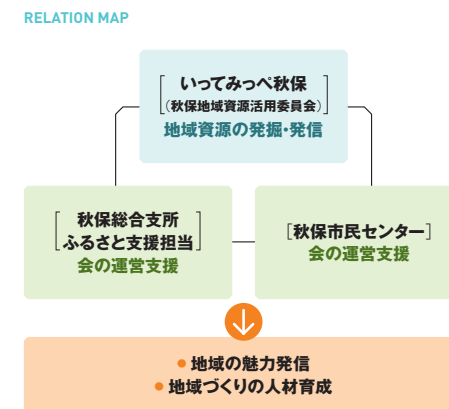
## PROJECT いってみっぺ秋保 (秋保地域資源活用委員会)

MEMBER  
いってみっぺ秋保(秋保地域資源活用委員会)

- 庄子 敏明さん
  - 槻田 栄子さん
- 仙台市秋保総合支所ふるさと支援担当
- 槻田 良孝さん
- 仙台市秋保市民センター



OUTLINE  
温泉を中心とした観光のまちというイメージが強い秋保地区で、地域内外の人が一緒になって秋保の魅力を掘り起こそうとする取り組みがあります。市民自らまちを歩き、取材・編集をしたパンフレットが次々とできあがっています。



CONTACT  
いってみっぺ秋保(秋保地域資源活用委員会)  
Tel: 022-399-2111(秋保総合支所ふるさと支援担当)  
仙台市秋保総合支所ふるさと支援担当  
〒982-0243 仙台市太白区秋保町長袋字大原 45-1  
Mail: aks015610@city.sendai.jp  
Tel: 022-399-2111 / Fax: 022-399-2924

### 歩いて見つけた地域の宝 人を惹き付ける秋保の魅力

温泉だけにとどまらない秋保の新たな魅力を発信しようと、「いってみっぺ秋保」(秋保地域資源活用委員会)では、秋保を歩いて観光するためのテーマ別のツアーパンフレット『いってみっぺ秋保』を制作しています。このパンフレットが、よく見かける散策マップや観光マップと大きく異なる点が二つあります。

一つ目は、参加する企画メンバー自らが何度も歩いて地域の魅力を掘り起こし、写真を撮影し、文章を書き、編集している点です。手間と時間をかけて、自らの体験を編集するというスタイルを貫いています。

二つ目は、パンフレットの種類。最終的には、なんと

県道62号にちなんで62コースを作ろうというから驚きです。豪快で遊び心に富んだ挑戦です。これまでに20コースのパンフレットが発行されています。地域に焦点を当てたもの、ヨガで自己回帰の旅、秋保郷サイクリング、カメラ女子歩き旅など、独自の切り口でコースを生み出してきました。

編集会議は、終始笑いの絶えない楽しい雰囲気です。漂っています。会員は現在約20人。30代から80代まで、地域内外の人が入り混じった構成です。秋保に生まれ住んでいる住民、結婚を機に秋保に移り住んだ女性たち、さらには仕事で秋保地区に関わった自治体の職員など、それぞれが秋保の魅力に惹き付けられて集まりました。また、パンフレットのデザイン制作に宮城大学の学生が加わるな

### 協働の道具箱



ツアーパンフレット『いってみっぺ秋保』をツールに、魅力ある地域資源を自らの足で掘り起こし、情報発信。

ど、さまざまな人の協働により編集されていることが分かります。

秋保育ちで最年長の81歳である会長の庄子さんは、会の魅力について「二人一人が楽しんでやっていることが一番の秘訣だ」と話します。それにやっぱりみんな秋保が好きなんだろう。秋保に集まる人は人柄が穏やかだし、ゆったりとした暮らしの空気がここにはあります」と話します。そして、「マップを作ってみて、新しく気付いたことがいっぱいあります。秋保についてはまだまだ分からないことだらけです」と笑顔で語ります。

### 進む少子高齢化と 埋没する地域の歴史 より地域に根付いた取り組みへ

自然豊かな秋保地区ですが、重要な産業である温泉を軸とした観光の面でも、団体旅行客が減少するなかで新たな資源を掘り起こす必要がありました。また、若い人のほとんどは進学や就職を機に地区を離れてしまい、少子高齢化も顕著な地域です。秋保をよく知る人も年々減り、奥深い地域の歴史や魅力を語り継ぐ人や機会も少ないという課題を抱えています。

活動を支援してきた秋保総合支所ふるさと支援担当課長の槻田良孝さんは「人づくりと観光資源

の掘り起こしをしたい。そうした行政の呼び掛けに市民の有志が集まり、取り組みがスタートしました」と話します。2012年から始まった活動は徐々に地域にも認知され、パンフレットを設置してくれる施設が増えています。今後は、パンフレットを活用したツアーや、秋保地区の人たちがあらためて地元を知るための資料として、より地域に貢献するものにしていきたいと意欲を示します。

「本当に62コースを作れるんですか？」とこっそり聞いてみると、副会長の槻田栄子さんは「二つ作ると、もうこれ以上思い付かないって思うんだけど、不思議に次の企画会議ではたくさんのアイデアが出てくるのよ」と答えてくれました。なるほどこれなら、62のコースが完成する日もそう遠くないさそうです。

(取材・文：市職員ライター 福田 圭佑)

### 協働のグッドポイント

- 行政の呼び掛けで始まった取り組みではあるが、活動の初期から市民と行政が互いの役割を共有しながら進めることで、市民主体の活動になっている。
- 市民と行政がパートナーシップを維持しながら活動を発展させる上で、両者の信頼関係をマネジメントしながら取り組みを進めてきた。

### 協働のひとびと



1: いってみっぺ秋保、秋保総合支所ふるさと支援担当、秋保市民センターの皆さん。  
2: 定例の編集会議では、担当するコースに分かれて作業。| 3: 最初の2年間は、100カ所近くのスポットを徹底的にまち歩き。

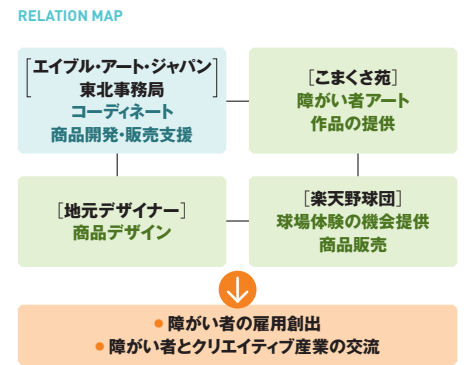
## TITLE 福祉とアートがつむぎ出す 新たな可能性

PROJECT  
SHIRO Lab.(シローラボ)

MEMBER  
特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局  
 ●武田 和恵さん  
 フリーデザイナー  
 ●加賀谷 明寛さん  
 社会福祉法人なのはな会 こまくさ苑  
 ●金野 歩未さん  
 株式会社楽天野球団  
 ●松野 秀三さん



OUTLINE  
アートの力で障がいのある人も当たり前前に地域で暮らせるように、障がいのある人と地元デザイナーがチームを組み、商品開発を行うプロジェクト「SHIRO Lab.」。2017年は「48時間デザインマラソン東北楽天ゴールデンイーグルス編」を開催し、球団の応援グッズを作りました。



CONTACT  
特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局  
〒983-0851 仙台市宮城野区榴ヶ岡5番地  
みやぎNPOプラザ内 No.16 / Tel: 070-5328-4208  
社会福祉法人なのはな会 こまくさ苑  
〒981-0965 仙台市青葉区荒巻神明町2-10  
Mail: komakusa-en@nifty.com  
Tel: 022-301-2335 / FAX: 022-301-2336  
株式会社楽天野球団  
〒983-0045 仙台市宮城野区宮城野2-11-6  
HP: <http://www.rakuteneagles.jp/>

### 力強い線で描かれたジェット風船

2017年SHIRO Lab.「48時間デザインマラソン東北楽天ゴールデンイーグルス編」が始まりました。普段は関わる機会が少ない総勢28人の参加者が、2日間にわたるワークショップを通して将来の可能性を広げていきます。福祉施設こまくさ苑の利用者4人とチームを組んだのは、彼らの描くイラストをもとにグッズをデザインする地元デザイナーの加賀谷さん。傍らでは両者をつないだエイブル・アート・ジャパン東北事務局の武田さんやこまくさ苑支援員の金野さん、そして楽天野球団地域連携・CSR部部長の松野さんらが見守ります。

### 思いがリンクするプロジェクト

まずは野球観戦を通して、日常では味わえないスタジアムの熱気をチームでもとに体感する交流会が行われました。参加したこまくさ苑の4人は、7回裏の攻撃前、球団歌に合わせてジェット風船を飛ばした時が「楽しかった」と振り返ります。この一番印象に残った光景をスケッチブックに思い思いに描くと、同じ風船でも大きさや角度が異なり、それぞれ個性が現れます。力強い線で描かれた風船が、タオルやトートバックのデザインのもととなり、応援グッズへと変身を遂げるのです。

武田さんは「学生時代に、障がいのある人の作品

イナリーが福祉の分野と結び付き、新しい仕事がつくり出せれば」と考えています。

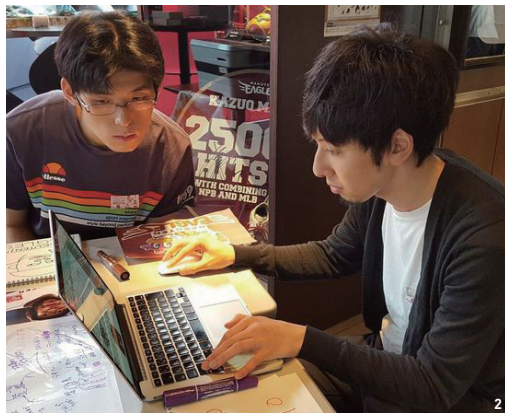
### 新たな出会いと可能性

障がいのある人が持つ芸術の可能性を広げる機会になるこのワークショップ。武田さんは「それぞれの能力を生かしてつながり合えるような場やきっかけを提供していきたいです」と今後の広がりを楽しみます。加賀谷さんも「こまくさ苑との活動を継続していくことこそ、SHIRO Lab.に参加した意味があるのではないかと思えます」と手応えを得ている様子。金野さんは「ワークショップではメンバーの新たな一面を見ることができました」とワークショップでの出会いで見た新たな可能性に胸を躍らせます。

### 協働のグッドポイント

- 障がいの持つ感性を引き出すため、地元のデザイナーとの交流会を現場で行うなど、グッズ制作のプロセスを大事にした。
- 福祉とアートに精通するNPOが、障がい者と企業、地元デザイナーをつなぎ、商品開発を行い事業化する仕組みを構築した。

(取材・文：学生ライター 高梨 菜由子)



1: SHIRO Lab. プロジェクトの皆さん。  
2: ワークショップでは加賀谷さん(右)と一緒に商品デザインを検討。



[2]: エイブル・アート・ジャパン提供

### 協働のひとびと

### 協働の道具箱

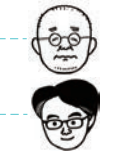


野球観戦の思い出を描き、商品開発へとつなげたスケッチブックとマジック。

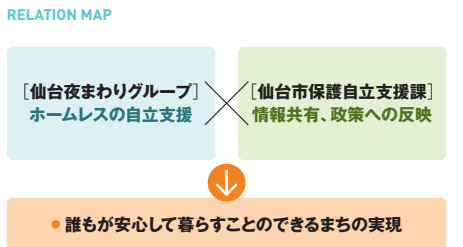
TITLE  
一度つまずいても、  
リスタートできるまち

PROJECT  
ホームレス伴走型支援事業

MEMBER  
特定非営利活動法人仙台夜まわりグループ  
●青木 康弘さん  
●新田 貴之さん  
仙台市保護自立支援課



OUTLINE  
厚生労働省の全国調査では、全国のホームレス数はここ数年10%ずつ減少していますが、仙台のホームレス数は、ほぼ横ばい。行政やNPOがさまざまな支援活動をしているにもかかわらず、減少に結びつかない背景や、現状に合った支援策を探ろうと、NPOと行政が協働して調査に取り組んでいます。



見過ごせないまちの課題

「愛する仙台のまちで、もうこんな亡くなり方をする人を出したくない」。2000年1月、たった3人で夜の街を歩き、当事者と思われる人に声を掛け、使い捨てカイロやみそ汁を配る。ことから始まった仙台夜まわりグループ。ホームレス状態の人を対象に炊き出し、相談などさまざまな支援活動をしています。

2001年当時の調査では、駅や公園などで生活する人は約130人。立ち上げメンバーの一人である仙台夜まわりグループの青木さんは「厳しい東北の冬に命を落とす人もいました。ごく身近な場所で起きている過酷な現実にはショックを受けま

した」と話します。

見えない現状を可視化する

生活困窮者の自立支援を所管する仙台市保護自立支援課は、10年以上前から「ホームレス自立支援連絡会議」を月1回開催。仙台夜まわりグループなどホームレス支援や困窮者支援に取り組むNPOや関係団体、行政が集い、情報交換をしています。

会議では、東日本大震災後、市内に見慣れない当事者が増えたことが共通の課題となっていました。さらに、24時間営業のネットカフェなどの利用、車中泊など、夜まわりでも見つけづらいケース

支援が必要な人のため手を組む

仙台夜まわりグループも保護自立支援課も「今までも連携してきましたが、協働事業という形になることで、距離が縮まりました」と声をそろえます。事業を通して、それぞれの強みや弱みなどをお互いによく知ることができたとともに、課題に対し「ともに考え、取り組む」というスタンスが遠慮を取り払いました。仙台市の自立支援制度やNPOの取り組みをまとめて紹介するリーフレットを作成するアイデアも生まれ、2017年4月から行政窓口などで活用されています。

当事者の現状に合った支援策や今後の政策立案に生かそうと、両者は、今も調査と分析を重ねています。

〔取材・文〕市民活動サポートセンター 菅野祥子

協働のグッドポイント

- NPOと行政が一緒になって、ホームレスの状況を把握するためのアンケートを実施、その結果を集計・分析しリーフレットや個人カルテ作成に生かした。
- 月1回連絡会議を継続開催し、互いに理解を深め、補完し合う関係性を築き上げてきた。

協働のひとびと



1:これまで欠かさず開催してきた支援団体と行政によるホームレス自立支援連絡会議。| 2:自立支援セミナーでは行政やNPOの支援活動の紹介、医療相談や法律相談など、さまざまな相談支援を実施。| 3:路上生活から脱出した方へのアフターフォロー。

協働の道具箱



ホームレス支援や生活困窮者に関する支援内容がすべて盛り込まれているリーフレット。内容や文面などをNPOと行政が協働で作りました。

## TITLE たくさんの人が 生きる社会に問い掛ける

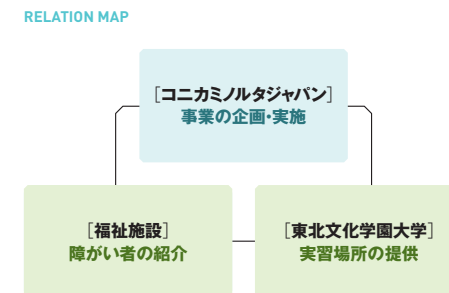
### PROJECT 障がい者就労支援 複合機清掃サービス

MEMBER  
コニカミノルタジャパン株式会社東北支店

- 加藤 雅生さん
- 土屋 滋さん



OUTLINE  
障がいがあっても働きたい、働き続けたいという願いをかなえるためには、その人が就労能力や技術を習得するだけでなく、働く環境が整備されている必要があります。この双方の課題を解決するプロジェクトとして始まったのが複合機清掃サービスです。



●障がい者の雇用機会の創出

CONTACT  
コニカミノルタジャパン株式会社東北支店  
〒980-0811 仙台市青葉区一番町1-2-25 仙台NSビル2F  
Tel: 022-722-2265/Fax: 022-722-2224  
学校法人東北文化学園大学  
〒981-8550 仙台市青葉区国見6-45-1  
Tel: 022-233-3330

## 障がい者の雇用を考える

普段私たちが何気なく使っている複合機。オフィスの日常を陰ながら支えている「職人」がいることをご存知でしょうか。2012年6月、企業の複合機清掃を通して、障がい者の雇用の機会を広げる取り組み「複合機清掃サービス」がスタートしました。複合機メーカーのコニカミノルタジャパンと就労支援事業を行うアイエスエフネットライフが2012年度仙台市中間的就労支援事業に提案した事業です。

福祉施設に通う障がい者は、複合機清掃サービスに従事するため、福祉施設内での清掃練習、コニカミノルタジャパンでのビジネスマナー・コミュニケーションの実習の場を提供しているのが東北文化学園大学です。大学には約30台の複合機があり、種類も設置場所もさまざま。大学での実習は多種多様な複合機の清掃を経験できるだけではなく、仕事の環境に慣れる練習にもなります。

真っすぐなまなざしとひたむきな姿勢で黙々と集中し、正確に作業をこなす、汗を流しながら丹念に複合機を磨き上げる姿を見て、東北文化学園大学の土屋学長は「学生が障がいのある方と触れ合う場ができますし、何より障がい者の方に合った仕事を見つけてくれる手助けになればと思います」と話します。加藤さんも「事業の話を持ちかけても、リスクを心配して断られることが多かったなかで、大学側が快く受け入れてくれたことは大きな一歩でした」と振り返ります。

## 障がい者がさらに活躍できる 社会を目指して

コニカミノルタジャパンでは、これまで生まれた認定作業員のうち6人を自社で雇用しています。最初はあいさつもままならなかったという彼らは、新たに認定作業員を目指す障がい者への指導、訪問先の企業や大学との調整、マニュアル作りや広報など、複合機清掃事業のすべてを担うまでに成長しました。加藤さんは「ゆっくりと時間をかけ

## ともに取り組む思い

シオン研修など、約3カ月間の訓練を受けます。次に実践的な清掃実習を経て、試験に合格した人が「認定作業員」として清掃に従事します。これまでの認定者は36人。2017年現在、約10人の認定作業員が36社の企業を定期的に訪問し、毎月約70台の複合機清掃を行っています。

コニカミノルタジャパンの加藤さんは「日本全国では何百万台という複合機があります。事業が軌道に乗れば、何百万台分の障がい者の方の仕事が増えるかもしれないと思いました」と語ります。

実際に企業を訪問する前に、本番を想定した清掃

ることが大切です」と話します。清掃を一人ではなく、三人一組のチーム制で行っていることも工夫の一つ。お互いの競争意識を刺激し、協力し合う効果を生み出しています。

障がい者にとって社会との関わりが増え、周りから「ありがとう」と感謝される経験は、彼らの自信につながることも、企業側にとっても障がい者に対する理解促進のきっかけにもなります。加藤さんは「この事業スキームが、多くの企業に受け入れられたらいいと思っています」と語ります。取り組みに賛同し、協力する企業も少しずつ増えてきました。誰もがともに明るく生きる社会を目指し、取り組みはまだまだ発展を続けていきます。

(取材：文・学生ライター 伊藤春夫)

## 協働のグッドポイント

- 障がい者の能力に合わせた研修から実習までのプログラムに認定制度を取り入れたことで、受け入れ側の企業への信頼性を高めた。
- 福祉施設、企業、大学が連携し、障がい者の働く環境整備に応用できる仕組みを考案した。

## 協働のひとびと



[1・2:コニカミノルタジャパン提供]



1:東北文化学園大学での清掃実習。  
2:ビジネスマナー研修。指導するのはコニカミノルタジャパンで働く障がい者の方。

## 協働の道具箱



コピーやプリンターなどの機能を併せ持つ複合機と、複合機を磨き上げるために欠かせない用具一式。

## TITLE 信頼できる仲間とつながる 穏やかな継続が可能になる

### PROJECT アディクション・フォーラム in 仙台

#### MEMBER

仙台ダルク

● 飯室 勉さん

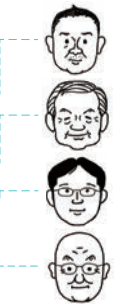
特定非営利活動法人宮城県断酒会

● 大平 孝夫さん

● 松井 健さん

キャンブル依存症仙台グループ

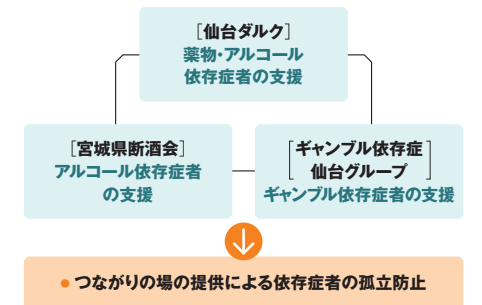
● 西野 彰洋さん



#### OUTLINE

アディクション(嗜癖・依存症)は、ある物事に依存し、それがないと身体的、精神的に平常を保てなくなる状態を指します。依存症の問題に関わる団体が協働で取り組むフォーラムには、依存症当事者だけでなく、その家族や専門家、支援者、一般市民が参加し、苦しみや回復の喜びを共有しながら、ともに学び合う姿があります。

#### RELATION MAP



#### CONTACT

仙台ダルク

〒980-0011 仙台市青葉区上杉 2-1-26

Tel: 022-261-5341

特定非営利活動法人宮城県断酒会

〒980-0821 仙台市青葉区春日町 4-1

Tel: 022-214-1870

キャンブル依存症仙台グループ

〒980-0022 仙台市青葉区五橋 2-12-2

仙台市福祉プラザ内(※会場利用)

## 他者につながる必要性を確認

仙台で初めてアディクション・フォーラムが開催されたのは2001年。それまで依存症グループの団体は個々に活動しており、他の団体との連携はありませんでした。ところが、フォーラムには300人以上の人が集まり、「同じ問題を抱えるグループの連携」を求めた人が待ち望んでいたかが明らかになりました。その後も仙台ダルクが中心となり、継続して開催。2017年で17年目を迎えました。「問題だらけで弱いままつながるお祭り」をうたい文句に、「誰かとつながることで楽に生きる知恵」を発信し続けています。

フォーラムは、当事者の体験談などのスピーチ、有

## 安心できる居場所がある

識者による公開市民講座の2部構成で行われ、宮城県断酒会理事長の大平さんは「定期的に自助グループから実行委員が集まり、1年がかりで準備しているんですよ」と話します。フォーラムに参加すれば、自分には「生きづらさ」という別の問題があることに気付いてもらえます。仙台ダルク代表の飯室さんも「心の中にあるつらい気持ちを誰かに吐き出せたら、もう回復に2歩踏み出している。一人で頑張らず、自分から主体的に支えを求めていくことが必要なんです」と話します。

実行委員会の打ち合わせで、毎月仙台ダルクに集

う委員は口をそろえて「ここは気楽で、お互いの按配を確認し合うような雰囲気が良い」と話します。キャンブル依存症仙台グループの西野さんは「気持ちが良い。私は自助グループで話せないことも、ここでなら話せるんですよ」と笑顔を見せます。

一方で、課題も山積みです。残念なことに、どんなに居心地が良くても、定着する人が少ない。依存症の回復には、継続が何よりも大切です。依存症が脳の病気であることを周囲に理解してもらえず、自分なんて悪い奴なんだと責め続け、苦しんでいる人たちが大勢います。そんな人たちが回復に向けた一歩を踏み出せるように、そして継続していけるように、「いつでも来られる、居心地の良い場所」があることを、フォーラムを通じて情報発信しているのです。

## 病気への理解と支援の輪を広げる

宮城県断酒会の松井さんは「アディクションに対して日本はまだまだ偏見が多いですが、アメリカではカウンセリングに行くこと、自助グループに参加することが日常的に、気軽に行われています」と話します。偏見のなかでは、本人も家族も本当に苦しんでからようやく治療に踏み切るケースがほとんどです。松井さんは「手遅れになる前に、少

しも多くの人にこの病気を理解してもらい、危ないと気付いたらすぐに助けを求められる社会になってほしい」と望みます。

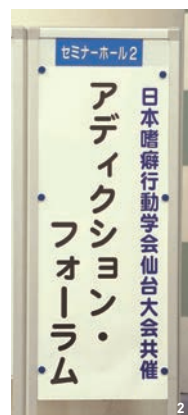
2017年のフォーラムは、日本嗜癖行動学会との共催という初の試みとなりました。大平さんは実行委員会代表として、「自助グループができることを積極的に言い、毎年新しい仲間とのつながりを深めながらフォーラムを開催しています。全国に向けて情報発信できることを誇りに思います」とあいさつしました。依存の多様化が問題となっている現在、フォーラムを通じて関係団体が互いに手を取り、支援の輪を広げていくことは、苦しみのなかにいる当事者たち、その家族にとって大きな一歩となり、力となっていくでしょう。

(取材・文：市民ライター 大林紅子)

## 協働のグッドポイント

- 依存症の問題に関わる人々の拠りどころとなる場として、年一回定期的にフォーラムを開催している。
- 自助グループがつながることで、当事者たちが自分を表現できる場をつくり、情報を共有することでセーフティネットとしての役割を見直した。

## 協働のひとびと



1: 2017年の第17回アディクション・フォーラムは、日本嗜癖行動学会との共催。

2: フォーラムは、多くの当事者やその家族のつながりの場。

## 協働の道具箱



実行委員会が毎年更新している「せんだいいみやぎアディクション・ミーティングガイド」60以上の関連団体と用語解説を掲載し、フォーラム参加者に配布。



## TITLE 誰かとどこかで つながるまちに

### PROJECT ほっとネットin東中田

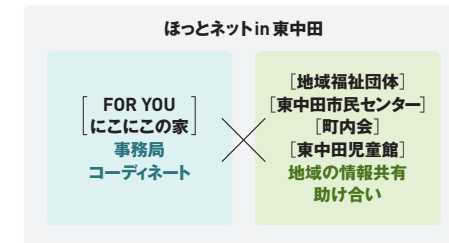
MEMBER 特定非営利活動法人 FOR YOU にこにこの家

- 小岩 孝子さん
- 大野 真知子さん
- 三上 圭子さん



OUTLINE 地域の福祉を担っている19の団体が、互いの活動の強みやネットワークを生かし合いながら、地域の誰もが安心して生活できる東中田を目指して活動しています。「いつまでも安心して住み続けられるまちにしたい」という思いのもとに、協働のまちづくりを実践しています。

#### RELATION MAP



●年齢・障がいを問わず安心して暮らせる地域づくり

CONTACT 特定非営利活動法人 FOR YOU にこにこの家  
〒981-1101 仙台市太白区四郎丸字神明 16-2  
Mail: nikoniko@w2.dion.ne.jp  
Tel: 022-241-0858  
東中田地区社会福祉協議会  
Tel: 022-241-5998  
四郎丸地域包括支援センター  
〒981-1101 仙台市太白区四郎丸字大宮 46  
Tel: 022-242-6351

## 「ほっと」なネットワークづくり

ほっととネットin東中田の「ほっと」は、「ホッと・な・ほっとする・ほっとけない」を表し、ほっとなつながりで地域課題の解決を目指したいという思いがネーミングの由来です。東中田地区は太白区の南東部に位置し、田園風景が残る地域に戸建て住宅や市営住宅・マンションなどの住宅地が広がるまちです。子どもも大人もお年寄りも、病気や障がいを持っていても、地域のすべての人が安心して生活できるまちを目指して活動を展開しています。「太白区が主催した会議で浮き彫りになった地域の課題をどうにかしたい」。その解決に向けて地域の団体が集まり、2002年に結成しました。2

カ月に1回、19の構成団体が出席して開催する会議は、お互いの活動や地域の情報を共有できる貴重な場となっています。これだけ多くの地域団体が定期的に集まりを続けているのは、全国的にも珍しく、密接なネットワークづくりが地域の結束を強める一つの原動力になっています。

## 地域内での孤独をなくしたい

最初に取り組んだのが、地域団体の情報を載せた『助っ人マップ』の作成です。住民だけでなく福祉や地域に関わる人たちでさえ、地域の施設や社会資源について曖昧な情報しか持っていないことに気付いたのがきっかけでした。自分たちの活動につ

いての情報に加え、いざという時に役立つようにコンビニやガソリンスタンドの場所も掲載。地元の新開店の協力を得て3950戸に配布しました。また、地域の施設情報やイベント・行事などを知らせる『ほっととネットin東中田情報カレンダー』を年3回発行しています。FOR YOUにこにこの家理事長の小岩さんは「地域の一人一人がどこかにつながることで、孤独がなくなれば」と情報発信の意味を話します。

地道な活動が実を結んだと感じたのが、東日本大震災の時でした。支援物資の配布先を検討していると、各団体から一人暮らしの高齢者や要介護者などに関する情報共有がなされました。これにより、避難所に来ることのできない方へのお弁当・支援物資の配達を、小中高生に手伝ってもらい迅速に実施することができました。四郎丸地域包括支援センター所長の三上さんは「培ってきたネットワークを活用して、支援の輪を広げることができました」と振り返ります。避難してきた方々が情報を持ち寄って助け合う姿を見て、「つながり」の大切さにあらためて気付かされたことも、その後の活動の大きな経験となりました。

## 人とのつながりを最大限生かす

活動を継続する上で活動場所の確保などさまざま

まな困難もありましたが、小岩さんは「そのたびに地域の人々に支えられ、多くの方々が背中を押してくれました」と振り返ります。また、東中田地区社会福祉協議会会長の大野さんは「ほっととネットは、結成当初から各福祉施設団体が東中田を住み良いまちにしたいと、積極的な広報活動を続けてきました。おかげで、自然と協力し支え合う形ができています」と胸を張ります。これから取り組もうと考えているのが「シニアがシニアを支える仕組み作り」。小岩さんは「支えられる側はもちろん、支えるシニアの方が生きがいを感じる機会にもなれば」と意気込みます。より良い「福祉のまち」を目指して、「ほっと」な活動がこれからも続きます。

(取材・文：市職員ライター 近藤尚寛)

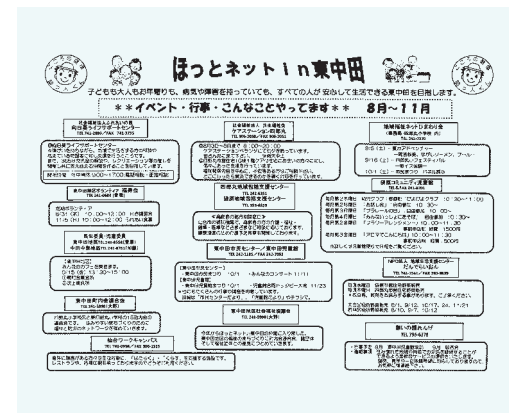
## 協働のグッドポイント

- 地域課題を共有し、目指すまちづくりの姿をマップやカレンダーなどで可視化することで、継続的なネットワーク会議を維持してきた。
- 自分たちのネットワークを生かして、地域団体、福祉施設からスーパ、病院まで地域に密着する生活情報や支援情報を収集している。

## 協働のひとびと



1: 事務局の小岩さん(左)と打ち合わせをする大野さん(中央)、三上さん(右)。  
2: 隔月で開催される定例会議には19団体が集まり、それぞれの活動や地域の話題を共有。



年3回発行している「ほっととネットin東中田 情報カレンダー」東中田で協働する団体のイベント情報が盛りだくさん。

## 協働の道具箱

# TITLE 誰もが表現者、おもしろさが垣根を取り払う

## PROJECT アート・インクルージョン

MEMBER 一般社団法人アート・インクルージョン

● 門脇 篤さん

● 菓子工房セレブレ

● 高橋 康之さん

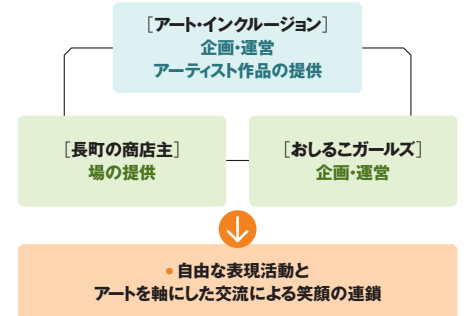
おしるこガールズのみなさん



### OUTLINE

世の中にあるさまざまなバリアを超えて、アートを通してすべての人を優しく包み込む(=インクルージョン)社会の実現を目指す取り組みがあります。長町では、福祉団体と地元町内会、店舗などが連携し、協働による人に優しいまちづくりの実現を目指しています。

### RELATION MAP



### CONTACT

一般社団法人アート・インクルージョン  
〒980-0811 仙台市青葉区一番町3-8-14  
スズキアバンティビル3F  
Tel: 022-797-3672 / Mail: office@art-in.org  
菓子工房セレブレ  
〒982-0011 仙台市太白区長町5-11-33  
RamsesA長町中央1F  
Tel: 022-346-7783

## アートで長町を彩る

障がいのあるなしにかかわらず「アートを通してすべての人を優しく包み込む社会を実現すること」を目標にして、アトリエの運営やイベント開催などを行うプロジェクトがアート・インクルージョンです。2010年から地域のさまざまな団体と連携しながら活動しています。その一つが、長町商店街の菓子工房セレブレとの取り組みです。アート・インクルージョンには、障がいがある個性豊かなアーティストが在席しています。その作品をセレブレの店内に飾っているほか、商品カードなどもデザインしました。来店する方々からも、華やかで素敵だと好評を得ています。

## 誰でも、いくつになっても表現者

セレブレオーナーシェフの高橋さんは「このプロジェクトは、一過性ではないつながりを築けると感じました。一緒にこの長町商店街を盛り上げていきたいです」と話します。また「自分たちだけでは難しいことも、協働することによって、点ではなく、面として広がりを持つ未来を築いていけると感じています」と確かな手応えを得た様子。セレブレの季節感あふれるお菓子と、アーティストの作品が相乗作用を起し、長町を鮮やかに彩っています。

また、2011年の震災後から月1回、今も続い

## アウトプットに自由を！

活動の基本は、「利益より、おもしろいこと！」です。既存の考えに捕らわれては、新たなおもしろさは誕生しません。アート・インクルージョンの活動に関わっている人は、障がい者も高齢者も誰もが表現者。みんな笑顔で、自分の持ち味を惜しみなく発揮し「おもしろい」ものを生み出しています。アート・インクルージョンの考えるバリアフリーとは、単に障がいを取り払うという意味ではありません。表現の垣根を取り払い、おもしろいものを自由にアウトプットできる社会をつくっていくということなのです。震災にも負けず続いているこのプロジェクトは、これからも新しいおもしろさを追求し、街中に笑顔の花を咲かせていくでしょう。

(取材：文：学生ライター 平岡 凛)

### 協働のグッドポイント

- アートを通して地域を巻き込む、インクルージョン(すべての人を優しく包み込む社会)が当たり前になるような仕組みを作った。
- 「おもしろい」をキーワードとしてさまざまなバリアを取り払うことで高齢者、障がい者を中心に誰もが関われるプログラムを実践している。

ている「おしるこカフェ」の活動があります。震災によって、活動場所である太白区長町も大きな被害を受けました。加えて、仙台市最大のあすと長町プレハブ仮設住宅が設置され、地域に被災者が集中。一般社団法人アート・インクルージョン理事の門脇さんは「悲しみに暮れる人々がまちにあふれる様子を見て、このまちのために、何かしなくてはと思った」と話します。そうして始まったのが「おしるこカフェ」。特に何をすることもなく、ただおしるこを食べながらゆったりと語り合う場を設けたのです。門脇さんは「おしるこは、健康にもよく不思議と人の心まで温め、緊張をほぐす力があります」と話します。おしるこカフェは大好評で、最近では復興公営住宅に住む「妙齢の」女性たちが中心となって活動する「おしるこガールズ」が運営に参画。料理の腕を生かし、おしるこやさまざまな味のお餅などを振舞います。ここは、食べに来る人も運営する人も「また来月ね」と笑顔になるところ。ほっこり温かい気持ちになれる憩いの場となっています。2016年には、おしるこカフェに参加している88歳の女性がラップに乗せて自分の人生を世界に発信し、話題を呼びました。これも「おしるこ」の力かもしれません。



協働のひとびと



1:長町エリアの魅力を発掘しながら、さまざまな違いを超えてアートで交流するイベントは大切な出会いの場。  
2:アート・インクルージョンの個性豊かなアーティストたち。| 3:いつも笑顔。おしるこガールズの皆さん。

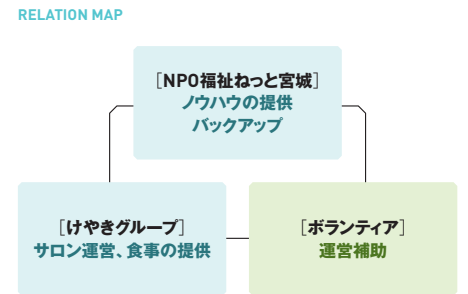
## TITLE アットホームな地域の憩いの場所

### PROJECT ほっとサロン将監

MEMBER  
NPO 福祉ねっと宮城  
● 藤田 佐和子さん  
けやきグループ  
● 佐藤 涼子さん



OUTLINE  
高齢者が住み慣れた地域で暮らし続けるためには、地域の支え合いが必要です。既存の高齢者向け福祉サービスと福祉NPOが蓄積した長年のノウハウを地域に生かし、気軽に集まり交流を深めながら、住民参加型の「居場所づくり」を実践しています。



● 地域で暮らし続けることのできる支え合いのまちづくり

CONTACT  
NPO 福祉ねっと宮城  
〒981-3213 仙台市泉区南中山2-2-3  
(特定非営利活動法人グループゆう内)  
Tel: 070-5329-6780/Fax: 022-277-1720  
けやきグループ  
〒981-3132 仙台市泉区将監1-11-12  
Tel/Fax: 022-773-0749

## 毎週木曜日のお楽しみ!!

仙台市内で福祉サービスを提供する11のNPOでつくるNPO福祉ねっと宮城と、泉区将監地区で高齢者対象の配食サービスを行うけやきグループが協働で立ち上げたのが「ほっとサロン将監」。ここは、地域の人の居場所と食事を提供する場です。サロンの会場は、仙台市将監老人憩の家。毎週木曜日になるとオレンジの旗を立て、来る人を歓迎してくれます。参加費100円＋ランチ代400円の合計500円で、10時半から14時半の間出入り自由。毎回平均して20〜30人前後の方が利用しています。サロンというと女性が多いイメージですが、ここは男性の方もたくさん参加しているのが

## 人脈がつけり上げた集いの場

特徴です。午前と午後に参加自由の講座があり、軽い体操や五行歌、筆ペン、絵手紙講座などが行われています。講座は、地域の人がボランティアで自分の得意分野を教えています。お楽しみのランチは、季節の行事やカロリー、栄養面に配慮した料理が振る舞われます。サロンに通うことが、参加者のやりがいと生きがいを感じる機会となり、「杖をつかなくてもよくなった」、「閉じこもり気味だったけれど明るくなった」など嬉しい報告がたくさんあります。

年々高齢化率が著しく高くなっているなか、



おいしいランチ。  
みんなで一緒に食事が何より大切。

NPO福祉ねっと宮城は地域の担い手を増やすため、2014年度に仙台市市民協働事業提案制度を利用してボランティア養成講座を開催しました。翌年2015年度には、地域の人が集って仲間をつくり、自然に助け合う居場所づくりを提案しています。

「けやきグループは、1998年から行っている配食サービスの活動を通して高齢者の「孤食」に気づき、みんなが集まれる場所がほしいと思っています。そんな時、NPO福祉ねっと宮城事務局長の藤田さんから声を掛けられ、地域のさまざまな団体の協力を得て「ほっとサロン」の立ち上げに結び付けました。

## サロン活動のモデルとして

ほっとサロン将監の運営が始まって2年余りが過ぎ、コーディネーターを務める藤田さんは「サロン運営も一段落ついたので、離れることも可能でしたが、顔なじみの方でも、ここに来ることが楽しいので、ボランティアとして通い続けています」と話します。参加者も徐々に運営の手伝いをするなど、自然とボランティア側になる方もいて、お世話をする側とされる側の立場がともフラットな関係にあります。

けやきグループサロン担当の佐藤さんは運営の課

題は「ボランティアの高齢化です」と言います。また、このサロンを地域として見守っている町内会長さんたちは「生活のために働かなければならない若い世代にボランティアは難しい。若い人が担い手になるためには、地域活動の一環として活動費を支払うなど、参加しやすい環境をつくる必要だ」と考えています。

現在仙台市は、老朽化が進む公共施設を建て替えるモデル事業として、将監市民センター・老人憩の家・児童センターの3施設の複合化計画を進めています。ほっとサロン将監の活動でノウハウを得たボランティアが活躍できる場になることが期待されます。

(取材・文：学生ライター 半沢友香)

## 協働のグッドポイント

- 福祉NPOのノウハウを生かし、地域団体と協働することで、特定の地域課題に取り組みモデルをつくった。
- 「居場所づくり」を目指し、食事の提供のほか、サロン活動やボランティア研修などを加えたプログラムを取り入れることで、サロン参加者が活動の担い手不足を補う人材に育つことを試みている。

## 協働のひとびと



1: ほっとサロンに集う人々。  
2: 仲間と話をしながら食事をするひととき。| 3: この日は筆ペン講座。一文字一文字丁寧に。

## 協働の道具箱

# 小さな世界から実現する 多様性を認め合う社会

## PROJECT 東北レインボー SUMMER フェスティバル

### MEMBER

Anego (アネゴ)

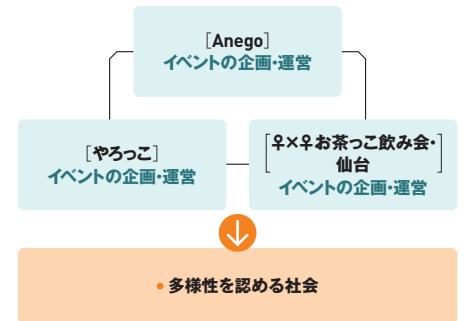
- キャシー菅原さん
- ♀×♀ (じょしじょし) お茶っこ飲み会・仙台
- MEME (めめ) さん
- やろっこ
- 太田ふとしさん



### OUTLINE

レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダーなどの性的少数者(LGBT)は、20人に1人程度とも言われています。東北でセクシュアリティに関する活動をする約30団体は、協働で開催したイベントをきっかけに、その後も情報交換しながらゆるやかなつながりを保ち活動を広げています。

### RELATION MAP



### CONTACT

Anego (アネゴ)  
〒980-0811 仙台市青葉区一番町4-1-3 レターケースNo.26  
Mail: anegosendai@yahoo.co.jp/Fax: 022-268-4042  
♀×♀お茶っこ飲み会・仙台  
Mail: ochakkonomi@gmail.com  
やろっこ  
〒980-0811 仙台市青葉区一番町4-1-3 レターケースNo.69  
Mail: thcgv@yahoo.co.jp

## 性の多様性が尊重される社会

メディアで「LGBT」という言葉をよく目にし、さまざまなセクシュアリティ(性のあり様)の存在が知られるようになりましたが、Anego代表のキャシー菅原さんは「社会に性的少数者が理解されているわけではない」と話します。  
Anegoは、あらゆるセクシュアリティの人が尊重される社会を目指し、2007年に設立され、仙台を拠点に活動しています。メンバーは10人。主な活動は、年齢も性別も国籍も違う多様な人が集うAnego Tea partyの開催です。「自分らしさ」「カワイイ」など毎回テーマを決め、参加者同士が多様な価値観に触れ、認め合う

場をつくっています。  
♀×♀お茶っこ飲み会・仙台のMEMEさんは「女性を好きな女性のための集まりがなく、私自身が困っていた」と、2010年から交流会を開いています。多い時には50人以上が集まることも。恋バナや結婚の話をしたり、悩みを相談したり、パートナーを見つけたりと、貴重な交流の場になっています。  
やろっこは、東北のゲイ・コミュニティを中心にHIV感染症やエイズに関する情報発信をしている団体です。青葉区にある、ゲイ・バイセクシュアル男性向けのcommunity center ZEL(以下、ZEL)も運営しています。代表の太田さんは「性的少数者にはつながりが重要だ」と

話します。

## 東北レインボーの仲間たち

三者連携のきっかけは、性的少数者の存在を多くの人に知ってもらおうと、MEMEさんが中心となって始めた「レズプロジェクト」。折り紙で連鶴を折り、公共施設などに展示するもので、東日本大震災が起きた2011年の夏に開催された仙台七夕を盛り上げたいという思いと、「いろいろな人に見てもらおうと、仙台にもさまざまな思いを抱いて生きている人がいるということをアピールしたい」という目的で始まりました。  
そして、2015、2016年の「東北レインボーSUMMERフェスティバル」に発展していきました。東北の性的少数者を可視化し、多様な性のあり様を発信しようと、東北六県から2015年は33団体、2016年は29団体が集結。これほどの規模は東北では初めて。当日は、団体紹介のブース展示、ステージパフォーマンスなど多彩なプログラムが実施され、性的少数者に限らず100人以上の参加がありました。お互いの存在は知りながらも、集まったほとんどの団体は初対面。キャシーさんは「この企画がきっかけで顔が見える関係ができた」と話します。その後各団体が実施するイベントに、お互いに誘いやすくなりました。

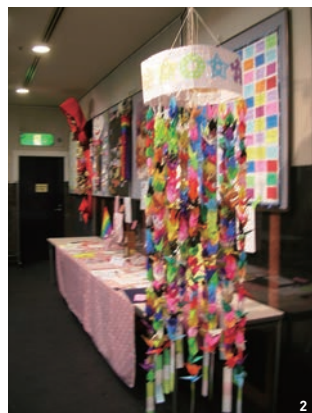
## 誰にとっても居心地のよい社会に

MEMEさんは「レズビアンやバイセクシュアル女性など、女性の性的少数者の場合は性的少数者であることに加え、女性であることの二重の格差もある」と指摘。キャシーさんは「多様性を認め合う社会が理想です」と語ります。また、太田さんは「誰もが何らかの当事者、さまざまな個性がある。私は普通であなたは違うと線を引いては、キリがありませんよ」と話します。東北レインボーに集った仲間は、緩やかなつながりを保ちながら、違う価値観を認める社会、受容する社会にしたい。ためにはどうしたらいいのか、活動を通して、私たち一人一人に問いを投げ掛けています。

(取材・文：市民活動サポートセンター 松村翔子)

## 協働のグッドポイント

- 多様な団体が協働することで、当事者や当事者でない人を巻き込みながら、交流する場をつくり共感する人を増やしていった。
- 権利の主張にとどまらず、多様性を受け入れ合う社会を目指すという共通ビジョンを提示している。



1: 2016年のフェスティバルにて、Anego Girls®のパフォーマンス。  
2: レズプロジェクトの連鶴。



[写真すべて: Anego 提供]



LGBTの象徴、多様性を表すレインボーカラー。フェスティバルに来た人を出迎える、思いを膨らませた風船。

## 協働の道具箱

## 協働のひとびと

# ひと夏の出会いが 将来の糧になることを願って

## PROJECT NPOで高校生の夏ボラ体験

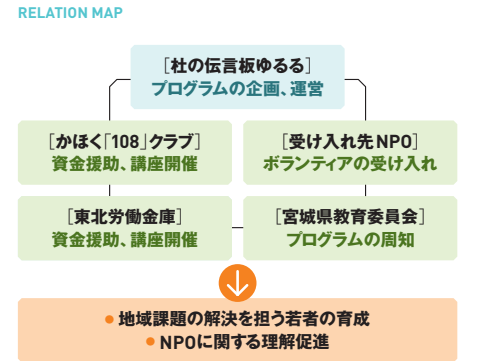
MEMBER  
認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる

- 大久保 朝江さん
  - 大西 直樹さん
- 認定特定非営利活動法人妻の会
- 飯嶋 茂さん



かほく「108」クラブ  
東北労働金庫  
宮城県教育委員会

OUTLINE  
夏休み、毎年多くの高校生が参加する「NPOで高校生の夏ボラ体験」は、まだNPOという言葉になじみのなかった2003年に始まりました。さまざまな企業やNPOの協働により実施され、これからの社会を担う高校生たちが、NPOやボランティアを体感し、その思いに触れ、将来を考える貴重な体験の場となっています。



CONTACT  
認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる  
〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡3-11-6  
コーポラス島田B-6  
Mail: npo@yururu.com  
Tel: 022-791-9323/Fax: 022-791-9327  
認定特定非営利活動法人妻の会  
〒983-0834 仙台市宮城野区松岡町17-1  
Mail: muginokai@k5.dion.ne.jp  
Tel/Fax: 022-299-1279

### 情報誌の発行から 高校生の体験型人材育成へ

杜の伝言板ゆるるは、「ボランティアがしたい」という市民や、「NPOを支援したい、協働したい」という企業・行政をNPOとつなぐ情報誌を編集・発行しています。杜の伝言板ゆるる代表理事の大久保さんは「情報誌を通じてNPOの周知に取り組んできましたが、将来を担う若者たちに、実際にNPOの活動を体験してもらいたいと考えました」と、「NPOで高校生の夏ボラ体験」を始めた思いを語ります。

夏ボラ体験は、県内のNPOや企業、教育委員会など、多様な主体が協働して取り組んでいます。共催

は河北新報グループ12社とその従業員で構成される社会貢献団体かほく「108」クラブ。東北労働金庫も協賛しており、資金の援助や高校生を対象とした講座を開催しています。また、宮城県教育委員会の後援により、県内の高校生に広く夏ボラ体験を周知することができています。

### 築き上げてきた信頼関係で 高校生への丁寧なケアに取り組む

夏ボラ体験は、県内で活動するNPOで行われます。大久保さんは「この事業は、単なるボランティア体験ではなく、高校生の人材育成・教育が目的です。この目的をしっかりと理解していただける、

信頼のおけるNPOに受け入れをお願いしています」と語ります。

杜の伝言板ゆるるの大西さんは、夏ボラ体験の開始前から、受け入れ先のNPOや、150人の定員に対し毎年200人を超える参加希望の高校生たちと調整を行います。また、NPOと高校生の顔合わせの場となる事前学習会では、受け入れ先のNPOの紹介、体験談執筆へ向けた河北新報の記者を講師とする記事の書き方講座の開催など、高校生が安心して体験期間を過ごすためのさまざまなケアを行います。

### 高校生にとってもNPOにとっても かけがえのない時間へ

夏ボラ体験の受け入れ先の一つである妻の会は、障がい者とともに国産小麦を使用したパンやクッキーを製造・販売する「コッペ」を運営する団体です。妻の会代表理事の飯嶋さんは「夏ボラの受け入れ側として、気を使うこともありますが、高校生の生き生きとした価値観に触れることができ、いろいろなことに気付かされます」と話します。従業員の方々は、高校生と一緒に作業できることを毎年楽しみにしているそうです。

飯嶋さんは「体験を通じて、NPOの活動を頭で考えるだけでなく、体で実感してもらえます。

高校生が将来、社会で活躍する時に、障がい者と一緒に働いた経験を少しでも思い出してけると嬉しい」と語り、「夏ボラ体験を通じて、引き続き高校生との交流を続けたい」と今後の活動にも期待を寄せています。

夏ボラ体験後に作成される体験談集には、「自分の考え方が変わった」「将来の目標を考えるきっかけになった」「今回の経験を今後に生かしていきたい」という高校生の気付きや思いがたくさん詰まっています。これから社会へ飛び立ち、将来を担う高校生たちにとって、夏ボラ体験は大変貴重な経験となっています。

(取材・文：市職員ライター 濱田佳那子)

### 協働のグッドポイント

- 高校生向けの長期休みを利用したNPOの活動体験プログラムとしては、先駆的かつ継続的な試み。
- 中間支援団体が、地域課題の解決を目指すNPO、ノウハウを有する新聞社や金融公庫、教育委員会と連携することで高校生にNPO、ボランティアを周知する仕組みを作り上げた。



1: 事前学習会で思いをアピールする受け入れ団体。  
2: 事前学習会で真剣に話に聞き入る高校生たち。



[1・2]: 杜の伝言板ゆるる提供

### 協働のひとびと



NPOとの信頼関係の礎となった情報誌「月刊杜の伝言板ゆるる」と、夏ボラ体験の集大成である「体験談集」。

### 協働の道具箱



## 未来を築く協働とマルチパートナーシップ

これまで「市民活動」が盛んなまちと言われてきた仙台市。自発的で多彩な市民活動は、多様な人々の出会いの場となり、まちを創造する原動力として受け継がれ、着実な広がりを見せてきました。その力は東日本大震災の際も最大限発揮され、復興・復興の大きな原動力となりました。

持続可能なまちであり続けるため、人々が手を取り合い、あらゆる地域課題に協働で取り組んでいく必要があります。現在各分野で協働事業を進めている若手実践者の皆さんが集まり、仙台市の未来につながる協働とマルチパートナーシップのあり方について語り合いました。

開催：2017年(平成29年)11月10日(金) 10:00-11:30  
仙台市市民活動サポートセンター地下1階市民活動シアターにて

【テーマ】  
活動の中で、どのようにネットワークを構築してきたか。

**佐々木**—— 仙台の市民活動は、全国のモデルとして、つねにトップランナーであり続けてきました。その一つのフラッグが、ここの仙台市市民活動サポートセンターです。これまでの「協働」は、どちらかというと行政とNPOが主体で、力をつけてきたNPOが、行政と対等なパートナーシップを築いてまちづくりを進めるというフェーズでした。そのなかで、仙台市は2015年度に従来の条例を改正し、多様な主体が関わり合うマルチパートナーシップという考え方で、協働によるまちづくりを進めていく方針を示しました。この座談会では、これから私たちの未来をどう築いていくのかを話し合っていきたいと思います。まずは、皆さんが活動の中でどのようにネットワークを構築してきたのかをお聞かせください。

**石川**—— 社会福祉協議会の石川達也です。震災後、仮設住宅入居者の方が復興公営住宅という終のすみかに移り住むときの新しいコミュニティづくりに関わってきました。現在は仙台市ボランティアセンターの運営に携わっていますが、災害時には災害ボランティアセンターの運営も行うことになっていますので、平時からの備えが大事だと考えています。ネットワーク構築の基本は、まず「直接会ってお話すること」です。何度も足を運んで、「こういう事業をやるので来てください」と説明をしたり、事前に相談をしたり。さまざまな団体の思いを聞き、相手を理解した上で、どう関わっていくか、どう噛み合わせていくのかを考えるのはなかなか難しいですが、大事なことだと思っています。

**大橋**—— アスイク代表の大橋雄介です。震災をきっかけに、避難所や仮設住宅の子どもの学習サポートなどを行ってきました。活動を続けるなかで、子どもの貧困問題が顕在化していることに気付き、2013年から仙台市と協働で生活困窮世帯の子どもの学習支援や



場づくり、家庭の生活支援などの複合的事業を展開しています。子どもの貧困の背景にある仕事やお金、医療といった家庭の複合的な問題をサポートするため、さまざまな機関と連携体制をつくってきました。例えば、みやぎ生協との連携では、店の集会所を子どもたちの学習場所として使わせてもらったり、フードバンクの仕組みを利用して食料を寄付してもらったり、親御さん向けには家計相談を実施してもらったりしています。ネットワーク構築に関しては、やはり石川さんと同様、「相手を理解すること」が重要だと思っています。お互いの方針を確認し、「それぞれが持っているものを、どう組み合わせれば相乗効果が生まれるのか」ということを、きちんと話し合うことが一番大事だと思います。

**菊地**—— とつておきの音楽祭事務局長の菊地新生です。毎年6月、障がいのある人もない人も一緒に音楽を通じて心のバリアフリーを目指そうと、とつておきの音楽祭を開催しています。2016年からは、障がいに対する誤解や偏見をなくしてもらいたいという思いから打楽器やダンス、アートなどのワークショップを行うTOGETHER ACTION PROJECT(TAP:タッポ)という事業を仙台市との協働で新たに実施しました。この事業のネットワーク構築において力を入れたのは、情報発信です。これまでとつておきの音楽祭に関わってもらった約340グループ、約3000人の方々に参加を呼び掛けたほか、仙台市を通じて、市内の障がい者施設などに案内を送付し周知しました。

**其田**—— 東北学院大学の其田雅美です。震災以降に立ち上げた大学のボランティアセンターで活動を行っています。学生ボランティアの活性化が当センターのテーマですが、私自身も社会資源である学生ボランティアの価値や認知度を高めることを大事なコンセプトにしています。大学間のネットワークはもちろん、NPO、自治体、社会福祉協議会など多様な組織と連携して活動に取り組んできました。心掛けてきたのは、オープンなスタンスを持つて、まずは「聞く耳を持つこと」です。宮城県復興に携わるなかで、そうした意識を持ちながらどのようにボラン

ティアマッチングしていくかを考え、協働でボランティア活動ができる枠組み作りを行ってきました。今後も、学生ボランティアを基盤に多様な主体とやかにコラボできるかという視点を持ちながら、一緒に手を取り合って活動していければいいと考えています。

**豊嶋**——都市デザインワークスの豊島純一です。私たちは今、ワンちゃん連れでも子ども連れでも、誰もが訪れやすい公園や河川などの公共空間の活用を通じて、いろいろな課題発見・解決のための協働の場を生み出すことに取り組んでいます。2017年度は、仙台市市民協働事業提案制度に基づき、公園の活用や運営方法を検証するための「西公園4 WEEKS」という社会実験を実施しました。「公園でこんなことができたらいのになあ」という思いを広く発信したところ、「私、こんな市民向けプログラムができます」という人が手を挙げたり、新たなプロジェクトを立ち上げる人が現れたり、どんどん「かゆいところに手が届く」ような連携が展開していきました。人が人を呼び、協働が協働をつくることは、公園というプラットフォームを舞台に起きていくのだと考えています。

**浜**——アリテイーヴイー株式会社の浜知美です。震災後に福島原発や東北の被災地が海外でひどい報道をされているのを見て、これではいけないと思ってインターネットTV局を立ち上げました。東北の魅力ある情報を、英語、韓国語、中国語などの多言語で発信していますが、これらはたくさん外国人に協力してもらったことで実現しています。ネットワーク構築のポイントは、「相手の文化を理解すること」。文化の違いに最初は戸惑うことも多かったのですが、これからは「多文化共生」の時代で、外国人の力も借りていかないと活動は継続していかないのでと思っています。今後、その部分で協働していきたいと考えています。

**桃生**——Granny Rideo代表の桃生和成です。行政や民間が設置した公共施設の運営を担っていますが、開かれた空間を「どうやって維持していけばいいのか」ということに、日々頭を悩ませながら

「テーマ2」  
協働まちづくりを持続的に進めていくために必要なことは何か。

**佐々木**——仙台市においては、人も大学も、いろんな資源も多いという環境があります。そのなかで、多様なセクターが、さまざまな形で協働のまちづくりを持続的に進めていくために必要なことは何でしょうか。また、これからのようなことが課題になると考えられるでしょうか。

**大橋**——まず一つ挙げるとすると、「できるコーディネーター」の存在です。例えば震災時は、被災地の中の人たちとつながっているだけでなく、東京や海外など、外部とつながっている「ハブ」のような人がいた地域では、震災後にいろいろな活動が立ち上がっています。それは、NPOセンターのような組織でなくてもいいと思います。個人でもいい。見つけてきた情報を共有し、人と人をつなげることができる良いコーディネーターがたくさんいるということが大事だと考えています。何かをやりたいという人の思いを受け止め、誰かとつなげていく仕組みがあるというのではないのでしょうか。

**佐々木**——大橋さんから「人」に着目してお話いただきました。コーディネーターや個人が持つ人的ネットワークを、日常的な場でつないでいくことが必要かもしれませんね。

**其田**——日頃からネットワークを構築することが必要だということとは、間違いありません。協働まちづくりを持続的に進めるために必要なのは、「多様な活動を知るきっかけづくりとその共有」だと考えています。実は学生たちは、多様な市民活動が仙台で行われているということと意外と知らないんですね。若い力である学生が市民活動に関わることは、非常に意義があることです。彼らに情報を共有するためには、各



仕事をしています。その中で感じるのは、やはり「オープンな姿勢でいるということ」でしょうか。公共の場には、いろんな考え、立場の方がいて、それぞれ自分の意見を持っています。そこでは、それぞれの意見が認められ、自分たちの活動が承認されることが非常に大事だと思っています。そのような場をどうやってつくっていくのかということが、今後、ネットワークの構築の仕方として大切になってくるのではないかと見えています。

**柳谷**——仙台市職員の柳谷理紗です。私は、まず住民として町内会の運営に関わっている立場でお話しますと、自分たちだけではできなくても進めるべきことがある場合、外の力も借りるという「オープンな姿勢を持つこと」が一つ大切なと思っています。花壇・大手町地区の「まちなか農園藤坂」の取り組みは、まさにその一例です。地域住民、市民研究員、農業高校生、NPOなどがお互いの得意分野を持ち寄ることで、活動に継続性を持たせることができましたし、私たちのような若者が町内会に関わるきっかけにもなりました。そして、それが有事の時にも生きてくることを、東日本大震災で実感しました。次に、震災のメモリアル事業を担当する市職員の立場としては、被災地域に関わることが多いのですが、地域の方の声を直接聞き、裏側にある思いを想像しながら取り組むことが大切だと感じます。せんだい3・11メモリアル交流館の立ち上げでは、市民の皆さんが積み重ねてきた記録や、専門性を持つクリエイターの創意工夫に助けられました。やはりその時も、各立場の得意分野を生かしながら、ともに良いものをつくるという姿勢が大切だと思いました。

**佐々木**——皆さんのお話から、まず自分で足を運ぶところから始めた、企業や専門機関と連携した、音楽祭や公園では市民の自発的な協働の姿があった、学生と社会をつないだなど、市内のいろいろな場所で、多様なきっかけからパートナーシップが生まれていることがわかりました。さらに、多文化共生の視点や場づくりの重要性、地域や行政を巻き込むことなど、「パートナーシップ」というものを強く意識してチャレンジしていることが明らかになったと思います。

組織にいるキーマンが橋渡しをしなければならない。例えば、こちらの市民活動サポートセンターがもつと認知されれば、ここに来ていろいろな活動の情報を入手し、自らも発信できるようになります。きっかけづくりのための「共有」を進めていくことが大事だと考えています。

**佐々木**——其田さんからは、市民活動の情報が学生にもう少し共有できると、さらに活動が広がっていくという提言でした。市民活動サポートセンターの役割にも示唆していただきました。

**浜**——少し別の視点の話になります。私は、仙台市協働まちづくり推進委員を務めています。最初は、「協働って何だろう?」とよく分からなかったんですね。市民の中にも「協働って何?」と思っている方がたくさんいると思います。最近感じるのは、まず外に出て、周りの人の話を聞くことが大事だということです。協働をなぜするのかというと、地域の課題を解決したり、まちをもっと魅力的にするためです。そのためには、身近な町内会の人たちと話をし、そこにどんな課題があるのかを聞くことから始めなければ、協働はできないんじゃないかと思っています。

**佐々木**——協働というものがよく分からないとおっしゃる方に対して、イメージを伴って協働を伝えていくことも非常に重要なことですね。

**豊嶋**——課題の一つとして、協働に関わる人数やステークホルダーは流動性に適応していかないといけないと考えています。西公園の社会実験は仙台市との協働事業ですが、担当課だけでなく公園を管理する区役所にも関わってもらい、現場の状況を共有しています。また今回は公園のエリアを限定することで、市民活動団体を主体とした実働する協議会を運営しながら進めました。これからの協働まちづくりを持続させていくためには、NPOや市民活動だけでなく、民間企業などももっと積極的に関与する必要があります。そのためには、客観的に現場のデータを可視化させ、「課題への気付き」をより多くの人が実感できるコミュニケーションツールが必要だと思っています。

**佐々木**—— 行政の中にパートナーシップを生み出した事例を挙げただけ、課題の可視化と共有化について示唆をいただきました。市職員の本谷さんはいかがですか。

**柳谷**—— 行政の立場で気を付けているのは、「協働を目的にしてはいけない」という点です。最近「協働」とよく言われるようになりましたが、課題解決のために、必要がある時に手を取るべき人と手を取ればいいだけであって、場合によっては、協働が必要でないこともあると思います。そして、市民の立場では「無理をしない」とことですね。はじめに何か大きな目的が共有されていて、そこに集まる人の思いが同じであればそれは持続しますし、個人がやりたいと思うこと、楽しいと思うことを軸に集まれば無理がないので、これも持続可能だと思うんです。「人」も重要なキーワードです。行政でも町内会でも、つなぐ役割の人が組織にいること。内部調整を主導するキーマンがいたり、話がうまく伝わっていない時にフォローする人がいたり、互いに補い合える関係性があることが必要だと思っています。

**佐々木**—— やはり、スタートが重要じゃないかということですね。無理をせずにスタートし、みんなの思いを共有できればいいということですが、しかし、場合によっては大人数をこなす仕組みとかが必要だと思っておりますが、3000人規模のイベントを継続している菊地さんはどうお考えですか。

**菊地**—— 先ほどのTAPは、仙台市に「こういう企画をやりたい」と提案し、協働事業として始めました。市と密に連絡を取り合い相談しながら進めていますし、仙台市の職員の方はワークショップに毎回参加してもらっているのと、一緒に進めているという実感があります。でも、果たしてそれが本当に「協働」なのか。僕たちがやりたいことと市がやりたいことが今は一致していて、ともに事業を行うことができていますが、そもそも「協働って何だろうなあ」という思いはありますね。「協働とは何か」ということも含めて、情報共有については市民活動サポートセンターと

ネーター的な人だと思っています。ただ、コーディネーターというのはなかなか表に出てこない存在なんです。それぞれが他の活動をしながら、「コーディネーター的な視点で物事を見ているというのが現状だからです。「コーディネーター」と言っても、それぞれの特徴や強みがあって、巻き込み力がすごく強い人もいるし、情報をたくさん持っている方もいるし、「括りにはできません。また、「協働」がなかなか市民に理解されていないという現状に関しては、今後、伝える力が重要になってくると思っています。私がディレクターをしているTHEEもという民間施設は、デザイナー、映像クリエイター、ライターといった方が非常に多く出入りしているところなんです。「協働」の伝わらない部分を、クリエイターの方々と一緒に発信していくという可能性もあると思います。

いうすごく素敵な場所があるので、ここに来ると協働まちづくりについての情報が得られるという仕組みが、より充実していけばいいのかなと思っています。

**佐々木**—— 「協働」という言葉を使っているものの、実はしっくりきていないということですね。たしかに「協働」という言葉が使われ出して何十年も経ち、大学のテキストなどでは定義もあるのですが、実際にはしっくりこない部分もありますね。

**石川**—— 「協働って何だろう？」と考える時、最初の目的、目標の設定がすごく大事だと思います。「協働だ」と、わーっと活動していくなかで、ふと立ち止まると「目的って何だった？」となったり、いろいろな団体が関係しているけれど、「なんかこの団体だけに役割が偏っていないか」という問題が出てきたりする。そういう時は、場面場面で振り返り、話し合いの場を設定していく必要があると考えています。それから、相手の組織を理解することも大事ですが、その人自身を理解することも重要だと思っています。「お酒が好き」とか、「こんな食べ物が好き」とか、「一見関係なさそうなことでも、一緒にやっていく仲間を知ること、その人を通じて活動が広がっていく場合があります。

**佐々木**—— 協働を模索するなかで、協働を始める一歩前の土壌をきちんと耕すことも大切だと気付かれたということですね。土壌づくりということでは、桃生さんいかがでしょうか。

**桃生**—— そうですね。皆さんから「協働がよく分からない」というお話がありました。それでもいいと思います。協働自体が目的化してしまい、一緒にやることがいという考え方になると、最初は良くても、そのプロジェクト自体が頓挫してしまうというケースをたくさん見てきました。目的意識を共有した上で、それぞれの強みを出し合えるような仕組みと、「志」の共有が非常に大事かなと思います。それから、「それって協働なんだよ」と言ってくれる人は、第三者的な人、それこそコーディネーター

**佐々木**—— 「志」の共有や協働の伝え方に関して、コーディネーターやクリエイターなどのキーワードをいただきました。

今日はご登壇の皆さんから協働のネットワークづくりと持続的な活動という2つのテーマについて、さまざまなアイデアやご意見をいただきました。また、「協働とは何か」を模索しながらも、前向きに取り組んでいらっしゃる様子が伺えました。これからの協働には、本日はいただいたアイデアを踏まえた強力な実践が必要ではないでしょうか。皆さんを含めた若い力が牽引力となり、仙台市で多様な形の実践が進んでいくことを願っています。

## 【進行】



### 佐々木 秀之さん

宮城大学事業構想学群事業計画学科 准教授  
2012年よりNPO法人せんだいみやぎNPOセンターに所属し、東日本大震災の復興過程では社会起業家育成、復興まちづくりに取り組む。2016年より現職。地域の資源・歴史を生かしたまちづくり、地域ビジネス、地域コミュニティの創造に理論と実践の両面から取り組んでいる。

## 【登壇者】



### 石川 達也さん

社会福祉法人仙台市社会福祉協議会地域福祉課 主事  
2012年の入社以降、太白区や宮城野区などの部署に所属。復興公営住宅のコミュニティづくり支援に携わり、市民活動団体やNPO団体と協働し、支援者同士で話し合う場の設定や交流行事開催などを支援してきた。現在は地域福祉課ボランティア協働係に所属。学校や企業、中間支援組織などと協働しながら、ボランティア、市民活動の輪を広げる取り組みをしている。



### 大橋 雄介さん

特定非営利活動法人アスイク 代表理事  
民間企業を経て2010年独立、仙台に移住。せんだいみやぎNPOセンターにおいて、NPOや社会起業家の支援事業を手掛けてきた。東日本大震災発生直後にアスイクを設立。経済的な問題を抱えた子どもたちの学習・生活支援に取り組んでいる。



### 菊地 新生さん

特定非営利活動法人とっておきの音楽祭 事務局長  
高校時代に定禅寺ストリートジャズフェスティバルにボランティアとして関わり、市民による手づくりのイベントのおもしろさを知る。その後、実行委員として活動。2001年より、とっておきの音楽祭に取り組み、音楽の力を通じて心のバリアフリーを進める活動をしている。



### 真田 雅美さん

東北学院大学学長室地域共生推進課  
東日本大震災直後から、東北学院大学災害ボランティアステーションの職員スタッフとして活動。学都仙台コンソーシアムの復興大学災害ボランティアステーションにおいて、幹事大学としてスタッフを務める。東北学院大学が立ち上げ、現在全国の約130校が加盟する大学間連携災害ボランティアネットワークの事務局も担当している。



### 豊嶋 純一さん

特定非営利活動法人都市デザインワークス  
2011年より都市デザインワークスに所属。広瀬川を中心に市民の暮らしや体験がまちに息づく「せんだいセントラルパーク構想」の実現に向け、ピクニックやまち歩きなど企画から、まちづくりの計画づくり・実践プロジェクトのサポートを行う。2017年からパークマネジメントに取り組んでいる。



### 浜 知美さん

アリエーヴィー株式会社 副社長  
東日本放送でテレビアナウンサーとして報道、情報番組の司会を12年間務める。震災後、有志でインターネットTV局を立ち上げ、海外スタッフとともに10言語以上で東北の魅力や魅力をSNSで発信するなど、持続可能な誰かが豊かに暮らせる仙台を目指し、さまざまな人々と連携しながら活動している。



### 桃生 和成さん

一般社団法人Granny Rideto 代表理事  
学生時代、商店街の活性化を目的に地域通貨とごみ拾い活動を組み合わせたシネマストリートプロジェクトに参加し、市民活動に出会う。2008年よりせんだいみやぎNPOセンターに所属。多賀城市市民活動サポートセンター・センター長を務めた後、2016年にGranny Ridetoを設立。さまざまな組織の社会的活動を支援している。



### 柳谷 理紗さん

仙台市防災環境都市推進室 主任  
学生時代に仙台市のシンクタンクである都市総合研究機構で市民研究員となり、都市計画道路予定跡地にできたまちなか農園藤坂でコミュニティを育む畑の運営に関わる。それをきっかけに花壇大手町地区の住民となり、現在は町内会役員、片平地区まちづくり会事務局として地域に関わっている。現職では、震災遺構 荒浜小学校の運営などメモリアル事業を担当。





西暦	元号	市民協働の動き	仙台市における調査・検討
1994	平成6年	「仙台NPO研究会」設立	
1995	平成7年	「NPOフォーラム」仙台開催	
1996	平成8年	「市民活動保険制度」創設	市民公益活動に係る課題等調査
1997	平成9年	「市民活動促進法」制定	市民活動団体との懇話会開催 ・企業の社会貢献活動実態調査
1998	平成10年	「サポートセンター」整備 「市民活動ハンドブック」改定・有償化	市民活動情報収集提供システムの整備に関する調査
1999	平成11年	「市民活動フォーラム」開催 「仙台市市民活動サポートセンター」開設	3
2000	平成12年	「市民活動促進本部」設置 「市民活動フォーラム」改定・有償化	27
2001	平成13年	「市民活動促進のための基本方針」策定 「市民活動ハンドブック」改定・有償化	62
2002	平成14年	「市民活動見本市」開催 「市民活動フォーラム」開催	94
2003	平成15年	「市民活動促進プラン」策定	142
2004	平成16年	「市民活動サポートセンター」指定管理者制度導入	188
2005	平成17年	「仙台協働本（せんだいこぼん）」作成 「仙台に情報の背骨を通すプロジェクト（骨プロ）」開始	239
2006	平成18年	「市民活動サポートセンター」移転	281
2007	平成19年	「シニア活動支援センター」開設	300
2008	平成20年	「仙台市コミュニティビジョン」策定	316
2009	平成21年	「学生とNPO等」を結びあわせるインターンシップ推進モデル事業開始	338
2010	平成22年	「市民活動サポートセンター」が震災のため一時閉館	367
2011	平成23年	「復興支援情報サポセン」から「版」発行開始	388
2012	平成24年	「復興支援活動報告会」開催	416
2013	平成25年	「せんだい市民カフェ」開始	419
2014	平成26年	「第3回国連防災世界会議」開催	421
2015	平成27年	「第3回国連防災世界会議」パブリック・フォーラムにおいて市民協働と防災テーマ館設置	
2016	平成28年	「仙台市協働まちづくり推進のための基本方針」策定	
2017	平成29年	「仙台市協働まちづくり推進プラン2016」策定	
2018	平成30年	「市民活動サポートセンター」リニューアル実施	

NPO法人数の推移（年度）  
\*平成29年度：2018年2月15日現在

## 〔団体・組織/取材協力〕

## 協働まちづくりの実践

2018年3月

## 監修

風見 正三 | 佐々木 秀之 | 桃生 和成

## 編集

市民がつくる協働の事例集制作委員会

## 編集長

葛西 淳子

## 編集協力

鈴木 瑠理子

## ライター

阿部 えりこ | 阿部 哲也 | 伊藤 春夫
大林 紅子 | 小野 恵子 | 葛西 淳子
菅野 祥子 | 近藤 尚寛 | 渋谷 聡子
菅井 牧子 | 高梨 菜由子 | 田澤 綾子
根本 聡一郎 | 濱田 佳那子 | 林 悠太
半沢 友香 | 平岡 凜 | 福田 圭佑 | 松川 真子
松村 翔子 | 溝井 貴久 | 吉川 登

## デザイン

松井 健太郎 (BLMU Inc.)

## 写真

渡邊 博一 | 福原 悠介

## イラスト

橋本 さとこ

## スペシャルサンクス

取材にご協力いただいた方々

## 企画

一般社団法人Granny Rideto
仙台市協働まちづくり推進委員会アクションチーム
仙台市市民局市民協働推進課

## 問い合わせ先

仙台市市民局市民協働推進課
〒980-8671 仙台市青葉区国分町3-7-1
Tel: 022-214-8002 / Fax: 022-211-5986

## 発行

仙台市

## 取材協力

頁	名称
---	----

**あ**

相澤 美紀
相原 美和
相原 米子
青木 朋子
青木 康弘
38 秋山 榮作
66 飯嶋 茂
飯室 勉
石川 達也
伊藤 亜津子
岩間 友希
遠藤 源一郎
大久保 朝江
大田 ふとし
大西 直樹
大野 眞知子
大場 秀行
14 大橋 雄介
18,68 大平 孝夫
18 小澤 義春

**た**

高橋 啓
高橋 康之
武田 和恵
立岡 学
田所 希衣子
千葉 恵子
千葉 裕貴
槻田 栄子
槻田 良孝
土屋 滋
豊嶋 純一

**な**

仲野 隆士
西大立目 祥子
西野 彰洋
新田 貴之
沼里 理恵
沼田 佐和子
根本 聡一郎

**は**

浜 知美
早坂 光子
平川 新
平山 新悦
40 平山 一男
14 深松 努
62 藤田 佐和子
10,22 堀野 正浩
34 本郷 紘一

**ま**

松井 健
松野 秀三
三上 圭子
10 溝井 貴久
30 村松 淳司
42 村山 裕俊
64 MEME
68 桃生 和成
22 森野 カロリナ

**や**

44 矢尾 研二
10,68 柳谷 理紗
38 横山 修司
22 吉田 環
44 米倉 正子

**わ**

46 和井内 貞明

**あ**

一般社団法人アート・インクルージョン
相原農場
18,68 特定非営利活動法人アスイク
64 Anego
一般社団法人荒井タウンマネジメント
46 荒浜再生を願う会
68 アリティーヴィー株式会社
48 行ってみっぺ秋保(秋保地域資源活用委員会)
50 特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン東北事務局
60 おしるこガールズ

**か**

外国人の子ども・サポートの会
60 菓子工房セレブレ
10 片平地区まちづくり会
10 片平子どもまちづくり隊
66 かほく「108」クラブ
56 ギャンブル依存症仙台グループ
68 一般社団法人Granny Rideto
62 けやきグループ
14 株式会社建設技術研究所東北支社
22 特定非営利活動法人国際都市仙台を支える市民の会((ICAS)
54 コニカミノルタジャパン株式会社東北支店
28 NPO こよみのあしおと

**さ**

06 3.11 オモイデアーカイブ
30 市民スポーツボランティア SV2004
06 舟栗の館
32 公益社団法人定禅寺ストリートジャズフェスティバル協会
64 ♀×♀(じょしょじょ)お茶っこ飲み会・仙台
58 四郎丸地域包括支援センター
40 新浜町内会
38 関山街道フォーラム協議会
68 社会福祉法人仙台市社会福祉協議会 地域福祉課

10,22 公益財団法人仙台観光国際協会 (SenTIA)
40 せんだい3.11メモリアル交流館
48 仙台市秋保市民センター
48 仙台市秋保総合支所ふさと支援担当
44 株式会社仙台シティエフエム(ラジオ3)
34 仙台市都心まちづくり課
42 仙台市文化財課
68 仙台市防災環境都市推進室
52 仙台市保護自立支援課
44 仙台市若林区まちづくり推進課
30 仙台大学
56 仙台グルク
34 せんだいティブロップメントコミッション株式会社
40 せんだいメディアテーク
52 特定非営利活動法人 仙台夜まわりグループ

**た**

貞山運河研究所
株式会社東建工営
14 東北学院大学
68 東北学院大学学長室地域共生推進課
40 東北学院大学教養学部平吹喜彦研究室
40 東北学院大学文学部菊池慶子研究室
54 東北文化学園大学
66 東北労働金庫
10,68 特定非営利活動法人 都市デザインワークス
68 特定非営利活動法人とっておきの音楽祭

**な**

06 中野ふるさとYAMA学校
36 特定非営利活動法人 中山街づくりセンター
50 社会福祉法人なのはな会 こまくさ苑
22 日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス実行委員会

**は**

18 一般社団法人パーソナルサポートセンター
58 東中田町内会連合会
58 東中田地区社会福祉協議会
14 広瀬川市民会議
58 特定非営利活動法人 FOR YOU にこにこの家
14 株式会社深松組
62 NPO福祉ねっと宮城
30 特定非営利活動法人ボランティアインフォ

**ま**

66 宮城県教育委員会
56 特定非営利活動法人宮城県鼎酒会
18 みやぎ生活協同組合
68 宮城大学事業構想学群事業計画学科
66 認定特定非営利活動法人表の会
42 陸奥国分寺薬師堂
36 有限責任事業組合モダンタイムス
66 認定特定非営利活動法人 杜の伝言板ゆるる

**や**

42 薬師堂手づくり市実行委員会事務局
32 株式会社山野楽器仙台店
32 株式会社ヤマハミュージックジャパン
64 やろっこ

**ら**

50 株式会社楽天野球団

**わ**

44 若林区まちづくり協議会ラジオ部門